必ず此物を尊び拜し市長となり玉べしと且主は極めて尊貴
なれば何かゐ之を惑はさんとおもひ又之を携て一の街を行万國
の栄華を以て之を示し主の虚貨を買んことを欲されども主
は絶て此を好心なく此市を離て去まで一厘一毛も之を買ざ
りき（馬太四章八路加四章五）由て稽ふるに此市は上古より設置
らるゝ代々なる處にして市は極て大いなり。時に基督徒盡忠
の二徒は此市を往んとし其中に入りしに舉都之が為に騒
動たり如何となれば天路を行く者は其衣が市人と異なり
たるを人々は皆之を目て異しく或者は之を見て痴人なりし
いひ或者は之を見て狂人なりといひ或者は之を嘆ぜ

いへり且又其言語も異なりたれば人々能く其話を聞分るものな
し如何となれば二徒の言語は皆天國の音なるに此市の人は皆
此世の俗人なるを夫故に互ひに相視ること他國の者に如し（哥
林多前二章七八）衆は又此二徒が彼貨を軽視ずるを見て皆大い
に之を不思議とせり其訳は右の二徒は其貨をもて樂しまざる或
ひは之を呼うけて貨を買とゝいふ者あれば二徒は其手をもて耳を
掩へ呼んでいはく「我目を轉けて諸の虚貨物を視ざらしめよ」
と。時としては又天を仰ぎて其心は天國を好むことを示すなり
爰に或一人二徒の有様を見て之を戯むして曰く汝の買んとする
物は如何なる物ぞや二徒は真顔にして彼に答へるまゝ

「吾儕が買ふ所の者ハ真理なり」と之をいふことよりも益く衆人
と藐視まれ或者ハ譏誚或者ハ嘲弄し又或者ハ之を打殺せ
と呼ぶなり是とおいて市人も漸く紛々騒ぎだし市も之が
為に騒しくば此事市長の聞に達し遂に自來りて彼が
最も腹心なる者に命じて吟味せし乃ち二徒を詰て曰く
汝ハ何れより来り何に往んとし且何故に其異りたる
衣を服して此に來りしや二徒ハ之に答へて曰く我ハ此世と
過る者なりて（希伯来十一章十三）將に本の邑即ち天上の耶
路撒冷に往んと欲するものなり人が我に問て何と買んと
と要まるやといひしに我ハ真理を買んとまるといひ

なり其外に何事とも未だ行ハざるに邑人し責買まる者とハ
何故に我と凌辱め我行路を阻げんとするや是よおいに吟味せ
る者心を思ふに此二徒ハ必ず癲狂か或ひハ此市を擾動して
來りしなると度り鞭を取て之と打ち土を以て之を汚し之と籠
の中に囚て市人に示しなり二徒ハ籠の内にあるて人の戲辱を受
けて居なりしかば市長ハ之をみて大に笑へり二徒ハ惟辛抱の
不ク人々に詬罵るれだ之が為に祝し悪言を加へらるれば之に
善言をあた人々に害せられんとまれば轉つて之に親切なせ
る故に市人にある一人二人の識者ハ二徒が斯のごとく人に凌辱
らるを見乃ち責て之と止しに市人ハ大ひに怒り轉じて

此人と詬り二徒と同類なるといひ並ひ之を罪せんとせりゝ彼の識者の曰く此二徒を觀るに諒に理ふ順ふの平民にして其意人を害ハぎ之を諸ての賣買する者に較べなば諸ての賣買を為る者ちて籠の中ふ囚へ重刑を加ふべきなりと是ふおひゝ紛々し爭論互に鬪ふゝ傷を致せる二徒もまゝ衆に曳と再び吟味されて其市人を擾動鬪せりとふと重て打たゝ鐵の鏈をもつて其身ふ加へて之を曳周行て衆人ふ示し此者の同類となり且之を是と為さしめぎ。

時に基督徒盡忠の二徒ハ益ゝ智惠をもつて自ら守り人から凌辱をうくるとゝいくども惟温柔ふ忍耐で居さりしかば此市ふ為る或る人が之を見て感ぜ之と輔けんと為しなるふ衆ハ此ふ因て益々怒り二徒を害死ことを決し遂に嚇ていひるハ籠と鏈との刑みてハ尚不足なり汝ち舉邑を擾動市人を惑たれバ其罪死ちべきなり獄ふおいゝ罪の擬を俟べしと

て乃ち二徒を獄屋に下し桎をもつて其足を束ねなり二徒ハ牢の中につて前に傳道者がいひしあとを思ひまもゝ信を堅ふして強忍び互ひふ相慰めゝいへるゝ我二人の内若し一人害と受るとゝ更ゝ福なりト各是願を有つ真神ハ全能全智ふて萬物を主宰たまふことを知れバ惟一心ゝ真神ふ依り安んじて主の命に聽せたり。扨二徒ハ審を受べき

の期いまをしらは法庭ふおいて罪を定められん為ゑ出でたり
審司の名ハ悪善しいへる人みゝ二徒を鞫の詞ハ大約左の如し。
市中を擾開貿易の邪魔と為し邑人を唆て互ニ争そハ
せ又或者を誘惑て邪道ふ従ハしむる等斯の如き所業ハ實
ふ王の法を犯ものなりト其時尽忠訴て曰く吾攻る所のもの
ハ彼れ真神に敵する者ゆへて我等素より理を守れバ市を
擾開しいヶ如き犯ふ至つてハ決して此情なし視ヨ我理ゑ循ふく
罪なきふ至ても我を輔けんとする者あり我ハ惟人々ゲ悪と去
て善ゑ従ん事を欲するのみ且汝ゲ稱して王と為ものハ此即ち
撒但みして吾王の仇なり此王と此王の衆僕とハ我之を畏れ

ざるなりト時ゑ審司衆ゑ諭して曰く此人の悪を知ものあらバ
速やかに来つて國の為ふ証據せよト是ゴおい〳〵三人出で証
據を立てゲ其人の名ハ嫉妬。事鬼。市誉。なり審司此三人ゑ
問て曰く爾等此犯人を識るまゝ彼の罪ハ如何にぞや嫉妬進
み出て誓を発し其言を實〳〵して曰く我ハ久〳〵此人を識ゲ
ゑ其名ハ善しといへども實ハ此世の巨悪ふして彼ハ君も民も
國法も習俗も一切棄て顧ず見ず惟力を盡して人を誘ハ君も
なく長もなきの説ゑ従ゲハせ然るを反つて信じて要理を行ふ
と稱へゑ我又親しく彼の言を聞ゑ此虚華邑の俗習を真神の
道ゑ較ぶるに大いふ相反まれバ両なゲ〳〵並立ぶ彼がいへる所を

もつゝ見るに明らかに彼は吾儕が行ふ所の義事を以て皆悪しとしひ且吾儕の是の如くなるは皆主宰に逆ふ〻いくるなり」審司又彼の罪を証據たつる為めに如何なる言あるや「嫉我のゝ多くの言を用ひ〻ゝば恐くは諸君の体屈とするべくれば他人の之を証據たて〻後若しも彼を死に致まに足ざれば其時よりそ我復言べきなりト是よりいく〻事鬼を召きて盡忠と指示し汝此犯人を視るに彼は如何なる悪きゝある乎時に事鬼は誓を発し其言を實として曰く余は一向此人を識らず且此人を識るを屑〻とせざるなり然るに數日前に彼〻言ひてあるを乃ち彼は實に民を惑まその徒なりと知まり如何〻なれど

彼のいへるは吾儕が鬼神に事へ諸の佛に奉まるは皆善〻かゝるに且主の怒りを受べく〻彼の此言にれば吾儕が佛に事へ鬼に事ふるこゝは皆益なゝして害あり且我の罪赦さゝなゝ終ふは必ず沉淪といへる此即ち我証まるところなり時に市蒼と召て其知る所といひ其罪証據なゝせゝり依て市蒼の曰く審司列位〻ヨ我は久〻〻此匹夫と見識なるが彼は實さいひうゝ程の妄言を咄いたり夫は何〻なれば常に我君別西卜（悪魔の長）と訕罵且吾君の貴妃朋友なる滋樂驕奢貪華放蕩利慾其他諸老〻諸尊長等も常に彼に賤〻まれたり又いへるゝ若しも衆として彼盡忠等の心と同じかゝ〻めば我輩は少しも是邑ゝ

おりこ〳〵且彼ハ擅まゝに爾おと詐りて天に逆ふの悪人なりと又種々の悪名と爾し此邑の諸長に加へられ述おれバ審司ハ盡忠に向ふて曰く奸賊邪徒ヨ今茲に列なれる賢士が証據たつる所を聞しや「尽我衷情と許ふるを容したまへ」審司叱つていひるハ「審下郎ヨ汝ハ今立どもろに殺まべき者なれども但衆に吾が柔のきと以て示さんこまゝバ姑く汝がいふこと許さん「尽」第一まづ嫉妬の証據立ふ荅へんに彼のいへる所斯の如しといへども但我いひし所ハ國の法でも俗習でも何事でも皆真神の道に違ふなれバ即ち是しかるぞし若し此言しにおひて宜しからぬ所ならば何ぞ我を教たまへ我其悪を知らバ之を改むべし」第二に事鬼が証據たつる所に荅ふ〳〵我のいひしふい人の敬事べき者ハ惟真神ふして又之に事なば其諭に依り従ふべし若しも人意の俗習にして真神の諭ふ遵がはされば則ち徒らふ事ふるとも何の益なく終に永生を得ざるなり第三市蒼の証據だて事ハ我誠に斯くいへり此市の長とその諸の友達と當ふ地獄に居るべかるぞ我ハ此のぞ〳〵直陳惟神の我を佑たまへんことを冀ふりと云ふ此時審司ハ此案を擬るた名旁らに列坐まる豪の郷乃老人等ふ向つて曰く吾邑を擾し者ハ即ち此人なり皆の衆ハ既に衆人の証據たる所を聞知且其自ら訴し語を聞名彼を生きて死まるべ爾ら

法老出埃及一章

尼布甲尼撒俱以理書三章

獅穴俱以理六章十二

の擬さ任せん然るふ但律の中載る所のことをもつて爾さ示をべ〜昔〜法老の時曽て一ッの法を立たゞ夫ハ異教の人が蕃滋て其國人さ勝んてを恐ゞ凡そ異教中の男を生るものハ命じて之を河さ棄させ「尼布甲尼撒」の時又一ッの法をたて凡そ王の像を拜せぬものハ即ち之を火爐ふ投入又「大流士」の時亦一ッの法を立て王を拜まるの外。神でも人でも何さ〜ずを之さ拜て求むる者あれば即ち諸を獅子の穴さ投いれたり。右さ述る三ッの王ハ悉吾君の臣ゞて其遺せ〜法ハ我應さ之ふ遵ふべきゞ今此奸徒ゞ其法を干せるを初より意ゞ〜て偶犯せ〜さあ〜ば實さ固より之を犯しなれば彼の罪ハ容〜がく且又我教の敵さ分りて自ら其罪を認めてゞるなれば應さ彼を死刑さ定むべきなゞ是さおい〜郷の老人達ハ退ひ〜是事を評議せり其人々

此名ハ即ち聲者。絶善。怨恨。嗜慾。恣肆。急悍。驕傲。怨妒。説謊。残忍。悪光恒。怨等ゞて各其意をのべてゞめたり「聲此人ハ實さ異端なるを我も明らゞ之を見さ」「絶此等の人ハ當さ世外さ居りそ〜べなり「怨恨彼の面目を見ても憎〜きなゞ」「嗜我ハ一向さ此人を容かゞ〜「恣彼を常さ我道を非〜まれば我も亦容ゞ〜「急殺ゞ「驕此等の下郎ハ實さ人として厭悪せ〜むるゞり「怨妒一ッなび此人を見ゞば我ハ直さ恨め〜思ふゞり「説此人ハ棍徒なり「残之を死ゞも彼の罪も尚あまりあゞ「悪速さ之を滅ゞべ〜「恒世

雲間捷徑到天門筆力妙甚

衆の物ともつて我こあたるとも我を彼と和睦しがゝ速こ彼と死こ定むべし。諸の年寄達ハ此言を然りゝ乃ち出こ其死を定めを故こ審司ハ令を下し曰ゝ盡忠を曳死地こ至りて惨ゝ辱しめの死を受しめよ。是時衆ハ盡忠を曳出して法の如く行ひ始こハ之を鞭うち繼こハ手足を乱打とし。刀そ乱こ割。後石こて之を擊ち剣こて之を刺し竟こ盡忠を木の柱こ縛りて火を以て之を焼て灰こなせり。其時我夢こ群衆の後こ車や馬がありて盡忠を供しと見しが尽忠ハ身既こ害せらるゝて遂こ彼の車こ昇り雲間の捷徑こを直こ天門こ到を音樂乃聲一路和ゝ鳴り。基督徒ハ復び曳れゝ獄中こ入り他日ハ定擬をまちかまへしが但万物の主宰者が彼の力となりゝハして基督徒の害を受るこを脱せしめば是こ於いゝ基督徒ハ進む事を得きり」

不須痛哭盡忠兄　死既盡忠主賜榮
謀害聖徒皆自害　人雖殺爾爾猶生

我夢こ基督徒の害を脱して復前こ行をみるこ伴もなく獨りの旅ぞと思ひの外一人ありて之と交り與こ伴となりゝ欲して互ひこ結んで兄弟となりゝ其譯ハ前こ基督徒盡忠の二徒が虚華市こて苦を行ひ却つて辱を受けたりゝと此人ハ見て之こ感じ遂こ義ハしき徒となりゝ者こ由て其名を美徒と名づけり此こ由て

考ふるふ人ゞ果して能く身を殺して道を証據たる時は即ち能く他人を感激し繼でき聖徒となりて此天路を行もの也時に美徒は基督徒ふ向つて曰ふ市間に尚多くの人ありまだ其時ふ至たれば必ず我に隨ふて來る者あらんと云つて行こゝいまゞ遠ゝぞして前に一人の利徒と名つくる人がゆくゝと見て二徒は之に問ふけ君は何方の人ふて何方に往んとまるや彼人の云ふ我は巧言の郷より來り將に天城に往んとまる者なりして初め其名をいたざりしが基督徒之を聞て大いに駭ひて曰く巧言郷に豈で善人のあるべき「利徒有て我もまた有こと証まべし」「基子の名は何と呼んで宜しきや」「利爾我は汝と與に行きと喜べり若し左なくば我は自身のみ行ねばならぬなり「基我曾て此巧言郷のことを聞て居たりしが人の言ふ此郷は甚だ富りしと「利然は彼郷は固より甚だ富む且富者の中多くは我親属なり「基爾の親類は何人なるや何卒教たまへたゝ「利一郷の中大半は皆我が親類なり其最も尊ぶ者は巧言。機變。附時。等ふして夫の巧言の先祖は即ち此郷の先祖なり又今色。両向。悉可。等あと皆我が親類なして且郷中に教を傳ふる者両舌の師あり彼は我母の兄弟なり吾實に汝ふ語るべし我は今尊貴れども吾が先祖は素招渡を以て活計となし舟を倒に行めなまバ已は東に向つて舟は西に行なと我の家財は多く此業に

つて得し所なり「基子に妻ありや「利有り吾妻は甚だ賢く乃ち賢婦の女なり其母は佯儀といひ吾妻は幼なる其礼を習へ上る事へ下に接遇その宜しきを得るを又我等真神を事ふるおくふかくて固く厳しく道を守る者なり二つの小なる殊あり一つは順風順水に非ざれば我等は舟を行ぎ一つは聖教金の履と履時は我等益々楽んで之に従ひ且天氣が閑晴して世皆美聖徒と稱るが如き時は我等更に楽しんで之に行なり。基督徒此を聞て美徒に近づき乞て曰く巧言郷に利徒あり聞く度ふに必ず此人なん若し然らんよい彼は彼の處ふても最も狡猾なるの徒なり「義兄は盍に其名を問はざるや彼は羞て言ざるが是において基督徒は

まづ利徒に近づき「基汝のいふ所に據れば汝は庸孫の人なり思はるべ若し我がいふとが謬はば爾は誰であるを知て居るなり則ち爾は彼の巧言郷の利徒といふる人なるべしや「利イエ此は吾名なり我を怨む者ありて遂に斯の如き名を我に號しなり我を之を受て如何ともすることなし蓋し諸善ふ效ふの人は毎も悪人の為に誹られる者なれば惟忍んで之を受るのみ「基故もなき怨に豈で人に此名を爾ふ加ふることはんや「利決して無し但時の相場に応じが ひ我意も同く之と遷變りて利まる所あるが故に人此名をもつて付たる也夫斯の如く利の我に就は實に我の福なり彼の悪心者が豈で此によりて妄に悪名を我に加ふ可んや「基我兼てより

利徒と以ふ名を聞て居なるべしの夫ハ即ち君であり〳〵こと我推量の如く謬ざるなり然るに君の行ふところが實ふ此名を稱ふと甚ぶ恐るべきことと我ハ思ふなり「利爾も亦斯思ふなり〳〵ハ我も仕方なし若〳〵同行を許さるれバ後よハ必らず我の善伴ふることを知るべし〳〵「基若〳〵我儕〳〵同行とさるるれバ順風順水なるも亦當ふ前ふ行べきこと此固より爾の意に合ぜ又聖教ハ金の履を穿るも破衣を衣るとも皆當さ之よ從ふべく聖徒よ至つて人ゞ之を称羨せるも窘逐むるとも其等ふかまとも當ふ之と友なるべきなり「利爾ふ為ゆるなれ我が自由ふ任せべし我今爾と偕よ行ん「基若〳〵も吾言に依らぬなら一歩も同行ハ斷なり「利我の旧道ハ益あつて害なけ〻を我ハ決して棄ざるなり汝も〳〵我〳〵偕ふ行ざれハ我も汝よ退つれぬるとふて我喜バ〳〵れ友達ふ後ふ來るまゞ我ハ自身のこゆくべきなり

時ふ我夢のうちふ基督徒と羨徒の両人の利徒よ遠ざかりて前ふ向きつゝ回顧てあるを見また三人のもろだりて利徒よ近づき〳〵挨拶を為し打連だちて進ぶ此三人ハ固財嗜金珍物多くい名の人なりて素より利徒の識人なり如何とかれた皆子供の時ふ同じ学校ふて学びしゆえかに其先生ハ漁利ぶくいひ教場ハ北の方ふあり貪心縣の好利郡ふてそのうちの市場ふ設けられ其所ふて門人たちふ力取。局騙。献媚。譏言。假聖徒

右の四人ハ深く彼の先生乃学筋を得亦各々自身ニ学校を建て先生となるべきものゝ其時嗜金ハ利徒ニ問ていはく前ゝ行人ハ誰人ゝるや（此とき基督徒と美徒ゝ先ニチラ〳〵見へゆへなり）「利前ハ行人を遠方の人ゝるゝも亦已の意ニ天國ハ行んとするものなり「嗜アなぜ我等と俟合せ一齊ニ行ざるや彼も我等も皆天路と行者なるに」「利固より俱ニ天路を行者なれども但前ニ行人ハ矯々孤介いつも已の意と執り他人と藐視り甚ぶ如信者ハ已の意ニ合ぬ時ハ直ニ擯棄て志ハなり「珍それハ實ニ美かゝることなり此等の人乃如きハ聖書ハいゝ如く義ニ過る者ゝて自と是として無暗ニ他人を

罪もるの徒なり然〳〵汝〳〵彼の意〳〵如何なることゝが合ざり〳〵か我為ニ語りたまへ「利彼の人ハ審ニ事ゝ〳〵とも考えぬ何時でもかまもぬ輙く前ニ行んとすると我ハ時の相場を見て動ん〳〵彼ハ真神ハ事ふる為ハ何もかも棄やるゝて危と恐もぬ〳〵も我ハ力と竭して命を保ち業を保存せんとなり彼ハ人ハ指摘されても意を固して變ず我ハ聖道ハ從ふゝ時の安ぜと危ことを察りゝて動静とかせり彼の謂ハ聖教ゝ被れ教をきゝて人ゝ賤まるゝの時でも之ニ從ゝべ〳〵と云ひ我ハ聖教ニ從ゝ人ハ金の履を穿ニ如霽日ハ遊ぶの〳〵如且人ゝ美〳〵稱ら〳〵の時之ニ從ゝん〳〵欲まるゝ「固君の意ハ固ニ是けまを必らず永〳〵其意を守

此ニミヲ引カ鷄引カス固先生ノ説アヤマレリ

るべきこゝにあるもの全躰人ゞ己の所有を保たゞして自ら失ふものハ吾之を不智といふん聖書にも蛇の如く智くといふあゝぞや（馬太十章十六）農夫ゞ刈穫せんと欲するゝ知ハ必ず天氣の晴とまつべし彼蜂まゝもつゝ歳の寒きこゝ知ハ深く藏まゝいでゞ食も得べし樂しむべきの時こゝにんで四方に飛出ると知るあゝぞや我等まゝふ彼に效ふべきなり夫天ハ雨天と晴天あり彼の愚なる連中ハ雨ふりにもかまはず行ども我等ハ行んと欲する時にハ必ず天のゝゝと待べし真神ふ事へ兼て諸の物と保ハ我ゞ欲する所なる蓋真神ゞ萬の物を以て人ゝ賜ひしなれを如何で人ゞ其物を保たゞゝその恩ゝ答ゆべんや

約百廿四ヲ誤解セルモノナリ

道理ゝ言ても之を棄べきの理なし。むし亜伯拉罕と所羅門ハ真神ふ事へて皆至つゝ富たりゝゝ約百のとるふ善人を推金その多たゝ塵のごとゝ（約百廿二章廿四）然れハ則ち前ゝ行く人ゝ果して君のゝるゞ如くなるハ大いゝ約伯の云ひ所ふ異なるなり「珍吾儕の所見ハ皆同ゝこゝの樣思まれゝ最早重ねての議論ふハ及ぶゝ」「嗜此事ふつひゝハ最ふ大丈夫なり我々の所見ゞ是こゝは聖書ふ照ゝても道理ふ合せても間違なゝ人ゞもゝ聖書を信ぜゞ理論ふも依らざるゝ知ハ自由の道も安きを求るの方も皆憐然ゝて知れざるなり「利君たちの知る通ゝ我輩ゞ今此路と行ゝれゝ何ぞ一ツの談をまゝけゝ互ゝ論じてハ如何假令ハ二人の人あ

此論を讀むときハ人ちがひもしきちがひ自身乃行ふ所を手ていに之とおこなふ者世にあるべしとなり

さて教を傳ふるも商賣のごとくなるも倘活計の利ふかるこ
と前なりて之を為さ專ら真道を務ること、丁度適當なる
事なりまぬ「嗜君のいまる所の意ハ我とか洞識う兄弟ヨ此事
ふつゝの我解明と聞たまへ。今さゝろみふ教を傳ふる者さ付
ていまさ一人の傳教師あて其人物ハ固さ美ハしけれども金と
得ること甚少なゝ。まゝ他の所ふゝ教と傳ふる者を見れハ金を
得ること甚ゞ多し。時ふ金を得んが為さ聖書を探索ふと益々
勤め聖道とつたへること益々励こ説教ハまゝ上手さ且ゝ
く己の所見を曲て諸徒の意さ循ゝ人の類斯のごゝて行ふ
ものを忠誠の人といへなり如何さゝ何れも金を得ることの多

かゝんと欲まるハ何の不可ふとのあるべき其上金が目前さありて
強さ求めぎるも得らるゝと之を得たれぎゝて何のさよまう式
ふゝゝ何んや夫故さ得らるべきものハ之を得ゝ可ことなり此のお
ゝかれハ彼ハ金を得るが為さ道と学ぶて益ゝ深く教と傳ふる
事益ゝ勤め所謂德日々さ進こ。事日々ふ成るものさおゝ固ふ
真神の意さかへるこのかゝ。まゝ己の本心を曲て諸徒さ循ゝこ
とハ此己と舍て人さ從ひ謙遜てゝ人と善誘ものふて傳教
の職にかへるもなり此ふよつて觀まで教を傳ふるものが小しの
月給と以て大さ易るハ豈で之を貪るといへべき此のごゝ行ふ者
ハ智恵こ力とつゝて善事を行ふこといへべきなり。若ゝ商

甚水心の声云々妙

賣人を付て之をいましめ其人生計ふ利益にのゝぎる折柄聖教を
ちゝがひ公會に入らざ之をうつて已が商賣の為筋をよゝく或ひハ
貴客が買物ふ來ま或ひハ富家の妻を要らゝ等のまゝを知りて
其様ま行なゝ如何で善らざるこのん乎如何ゝ之れで真道
從ひ真神ま敬事るハ誠ま善ゝ之れバ何の為ま之を為ゝ
以本心の聲を聞ま及ま且まま富る妻をめゝり貴客の多く
來る等ゝ事ハ何も不可ま之にのゝず且皆我真道に從ゝ
に因て得ゝる善利ふゝて妻ま富客ハ貴く。財ハ多く。真道ま從ゝ
ふて得る。此四ッの善あれで此のゝゝゝて行ふハ豈善ゝ
て益あゝざらんやト。嗜金ま斯のゝゝ述て利徒の意をひゝ

けで衆ハ深く其言を然アゝて謂ふ是くのゝゝ行ふまゝ誠
ふ善ゝて益のり絶て議論まべき瑕隙なゝト互ひゝ深意を語
アあひぬ
扨。固財。嗜金。珍物。利徒。なゝいゝ四人の者ハ互ひゝ志を合せて何で
も基督徒ゝ義徒の両人を窮らせゝ前ゝ利徒が閉口させゝ
なる敵を打んものゝ看まで彼の両人ハ未遠くも行ふ程でオヒく
ト呼のけたり。両人ま此聲を聞て暫らく足を止め四人ハ之ゝ追
つゝんゝ往ゝ相談て固財ハ嗜金の言分を以て両人にい
まんゝまれバ利徒ハ其事を不可ゝいゝ其譯ハ前ゝ両人ゝ譴責
らまゝふゝま何ゝなく両人の山が荒きゝふ覚へ又もや御意に

聖書六章 約翰傳六章廿六節

觸んことを恐るゝなり然れ共意ふく固財ハ其うちでも年老の人なれハ此人ゝをいとのゞゝも一番すゝなんゝ。時ふ四人ハ基督徒美徒ゝ近づきゝく挨拶を為ゝおきり。固財ハ嗜金の言をいく二徒ふ述べ何ゝぞく辨むべきハのゝを之を辨ゝたゝくゝいゝ。其時基督徒のいへるよう斯ゝうなる言葉ゞ何程沢山あらくゝも是等のゝくは聖道の初学者の能く辨ずるところなり聖書の言ところふ據るふ人ゞ餅と魚を食ちんゞ為め基督を尋ぬるハ固ゝり不可。まして基督を假り真道を假りて已ゞ益を求むるの道具とかすハ更ゝ悪むべきゝなり聖書ゝ載る所と稽ふるゝ異族あり偽善ゞり魔徒あり丁度爾ゝ同ゝ蓋ゝ異

哈抹示劍ハ創世記三十四章二十節

寡婦路加二十章四十七節

猶太職業約翰傳十二章六節

族の人ゝはむゝ哈抹示劍といふ者雅各の女ゝ六畜と我物ふせんと思へり然るふ割禮と受るふあゝされで此物手ゝ入きゞゝ乃ち其族人ゝ向ひて我衆もし彼割礼ゝ效ちゞ雅各の家業と六畜と悉我物ゝあるべゝといへり夫彼ゞ圖んとするものハ女子と六畜ふして之を圖の仕方ハ真神の民ふ效ひゝく割礼と受たるゝ。まゝ偽善者ゝハ善と假るの法利實人の如き者にて其意ゝ汝ゝおゝゞ何ゝとなれで寡婦の家貲を呑んゝて長祀祈禱と謀の道具ゝなせり但彼ハ其報ひゝゝて真神の重刑罰を免ふふべゝのゝぞ。まゝ魔徒ゝハ即ち主と賣の猶太女きものふて其意まゝ汝ゝおゝゞ何ゝとなれバ彼ゞ救主ゝ從ひたるハ特伐中の銀

聖書沉淪之子約翰傳十七章十一節

を得んとてなり然るに此人終に敗亡て主宰を棄られたり聖書に彼は沉淪の子なるとあるが如し。我が思ふに人の若し世利の為に真道に從ひ難なるば亦必ず世の利に為に真道を棄るものなり誠に猶太のごとき利の為に救主に從ひたるごの故に亦利のため救主を賣るなり今汝のいふ所の如きは則ち彼の異族偽善魔徒に效ふ者にして後に報ハ亦必ず彼が如くなるべし。是よりて四人の者ハ互ひに顔見あはせて一言の答もなく折から美徒も傍らに基督徒が言を助るふりして彼の四人の者ハまもなく以て辭なく供に立ても居れ難ぶ少し歩を緩めて両人ハ前に往こと譲りたり。其時基督徒を美徒よいくるよう

世路安逸ノ地稀ナリ天路ニ赤知ベシ

此金塊ノ発見日々新聞紙ニ見ル今ハ何ナル事ヲ生ズ

我等ハ皆肉躰の人なるふ我が正言を彼等ハ受るとくあくハず口を緘て敢て對へ得ざれど若し真神の審判に遇ひ其嚴なるとこと烈火の如くなるべ此輩ハ將に如何なるべきやとひつゝ二徒ハ則ち進み一ツの平坦なる錦地に差かゝりしふ此處ハ安逸といふる所にて二徒ハ此處と行あひぶハ甚だ樂しく覚へたり然れども惜きかな此地ハ格別に大きくなるねハ未だ何程行ぬうち最早思外に近づかゝり此處にまゝ一ツの小山ありて其名を財山といひ中に金礦あり故に此所を過る者ハ毎も此山を奇らしく思ひ遂に正路を舍て之を探らんとす彼の礦に近辺に近づけば其所乃ち土ハ下が虚廓であるゆへに忽ち其中に陥りて死するもあれば又ハ此處に傷を受て生

底馬ハ提摩太後書四章十節

涯全たく愈らぬる者あり。其時我夢の中に見て居れバ此路より離れて稍遠き所に底馬といへる人立派なる様體にて礦の前に立ち毎も此處にて天路を行人を招た其處を視せめたり則ち今三徒を見かけ呼て曰るゝ来なゝへ〳〵此ハ一事にハ非ず爾きゝて觀たまへと曰「基我々ハ正路を捨させて其所に往くべき程の如何なるてゝ其處にあるや「底馬此所ハ一ツの金礦ありて其中に金を掘てある者あり汝そ〳〵此に来りて少しく汝の力を働らゝかゞ之によつて巨富となるん。之を聞て義徒の基督徒に向ひ「義何故往て觀ざるや「基我ハ決して往まじ兼て聞及ぶに彼の處ハ人の多く死する所なるよ〳〵且財寶を得んと欲する者ハ毎も財寶の為に陷いれられて其天路を行くことを得ざるものなりと遂に底馬ハ呼ぶるゝ其所ハ甚だ危險にして多くの天路人を阻たぐるの地にゝ「底此處若しもゝ自謹慎なばなるべの危うきことの有べきやといへり。然まども此時底馬の容貌ハ少しく慍色あり。基督徒ハ美徒に向ひて「基吾儕ハ一歩ふても往て觀るべのゝ當に正路を直に行べきなり「美我おもふ利徒ハ此處に來りし時彼ハ若しゝ之を招しなゝで必ず其ものに應ずべし「基誠に然らん如何とかれで彼の志ハ本之に向ふゆゝなりを然まども果して彼所にいりゝもで但九死一生の危難なり話を折柄底馬復び呼ぶるゝ爾のこハ何故来りて觀ざるや。

底馬霊魂モ永死セザ時々信者ノ耳ニ亮ノ耳語スルコアリ

列王下五章二十節其哈要貪而得癩

基督徒直ちに其言を斥けて曰く底馬ヨ爾ハ今ノ主の正道と紊乱主に敵たるなり爾ハ先づ此世を戀ふて正路を舍てなれバ主の司道者ら已に爾の罪を定めたり何ぞ我を誘ふて爾に效ふせんとするや若し少し正路を離るゝこゝあらば主ハ必ず聞知て主の前に立のゝ我をして羞恥むべし我ハ寧ろ懼なるゝん恥しを欲するなり「底余も爾輩のこゝ知ものなれば若我ためふ片時候たまへ我もまゝ同道いたすべし「基爾の名ハ何とゝや我先に呼びたるものハ爾の名に非ざりしの「デス然り我名ハ即ち底馬といひて亜伯拉罕の後裔なり「基我ハ爾を識まり爾の祖ハ基哈洗爾の父に猶太爾ハ其跡を踐で行き我

猶太馬太廿六章十五節同廿七章三節

輩を誘惑たり是魔鬼の為るところふ效ふなり夫爾の父ハ主にそむき既に身を捐て死なれバ爾の罰も豈で之に異るなんや我若し主の前ふ到らハ必ず汝の所業を以て告べきなりと言まゝ二徒ハ前に進こたり其後にして利徒の輩ハ財山に近つきし頃一たび底馬の招をかゝむり遂に往て之に就ぐ其後或者ハ金礦ふ陷て死し或者ハ金礦に入りて金を掘まゝハ金礦の毒あたりて死るもの其委細ハ知らざれども惟天路ふおいて復たび此四人を見のけさり知。

利徒底馬志相同　他一言金彼立從
此輩可憐貪世利　却遺天業死途中

所多馬・事創世記十九章参節

時に我夢のうちゝ基督徒と美徒の二徒が平坦ある路の外ゝ至るを見き。路旁ゝ一ツの古柱所ありて其かたち甚だ奇なれば二徒ハ之を見て大いゝ驚異尚も之をみるゝ婦人憂ひて塩柱と為りしが如し。二徒ハ此柱の何物ゝて又何故この所にあるや一向ゝ解せざれバ暫し打眺て居たりしが其うち美徒ハ柱の首ゝ字のあるゝを見出し大ゝ然なるゝ其文字ハ古くあり且已の学力ハ浅くして讀ゝけまだ遂ゝ基督徒と呼びて之と觀せ兄ゝハ能く解るや否やと問ふ之ゝ答へて基督徒ハ仰ぬきみるゝ其字畫羅得の妻を憶ふ當しとゝ五字なれバ之を美徒の為めゝ釈き。初て知る此柱ハ羅得の妻が所多馬城を出る時貪りの心ろ消へやらず回顧て見たるゝより遂ゝ浸じて塩柱となりし者なると。今二徒が此を見しハ實ゝ奇とすべく懼べきことなり此事ゝつひて二徒ハ互ゝ論をすゝめたり「基噫兄ゝ先ゝ底馬の招きを受て今ゝ此物を見しハ實ゝ外事なゝぞ思ふゝ底馬が財山をみしひし時爾ハ其方へ往んとせしが其時我もまゝ爾ゝ同意して爾のおもふ如く為ハ真神ハ必ず我を罰して此婦人のゝ後の鑑とされしも計られぞ」美我先ゝ妄想を懐きしハ今甚だ憂ひ悔たり然るゝ真神が羅得の妻ゝ如くして我を罰したまはざりしハ實ゝ不思議なることなり如何ゝ我を羅得の妻ゝ較るゝ其罪ゝおいて少しも異ふことなし彼ハたゞ回顧たるのみなれども我ハ往く

觀んとおもへり然るを真神の我を寛めたまひし御恩ハ如何
大いなるとなるや我が妄想を起せしこと永く愧べきことなり
「基今我等が見ることふより能く思察して後の戒めと為べし
也。夫前の危きことを免こうるとも後尚あやうしなりて遇べけ
きバ固より慎まねバならぬ苦即ち羅得の妻の如く其邑を逃
れ出ることなりて邑人と與に亡びさりしかども後つひに天
の為に滅ぼされて身を柱となすなり」「美然る此婦人を
誠に鑑となすに足る一ツハ我を警めて其悪を效ふことなる一ツを
人に示して若し之を以て鑑とせられば必ず殃ひ哥喇。大
單の亞比蘭。及び同じ罪の會長二百五十人が地裂のなかに陷

里て以色列の鑑となるが如きことなり(民數紀略十六章三十二)
今底馬と其同じ人ハ何故に是ところに在りて財を得んと欲し
安立にありて懼る心なしや之吾解せざる所なり。夫の羅得の
妻ハ聖書に以所に據バ彼の身いまだ正路をまそぐ只其心に貪
なりの念を生じ回顧しのゆえに遂に變じて鹽柱となれり且此
前鑑が底馬の處に目を舉れば見らるる程の近さなるに胡ふ
まで妄に此の若き所なるせしや「基此まことに解りがたきこと
なれども但此のごとく死を觀るまつけても人が利を懷ふ心まで深け
れども溺れて返ることを忘るるものなり人が官府にありて盗賊の刑罰討
きたるを見る時。盗見が人の物を取り法場にて賊が斬首さるる

創世十三章十節

と見る時盗兒ゲ私竊を行ふ人ゲむ〳〵。聖書ふ所多馬の人の大悪を言り彼ハ真神の前ゑ慶て諸〳〵の悪を行ひたまと夫ハ真神の恩を受け沃土ふ居り埃田の樂乃如きありながら悪を行ひ〻ゑ益々真神の怒をむく烈火の為ゑ滅ぶされ〳〵なり若し理ふまつ〻論ずるも前ふ刑をうゑる者乃り〻我鑑となゑ我〻之を知りつ〻尚悪を行ふまゑ後の刑罰ハ必らず更ゑ甚だしきこと乃るべし「美兄のいまゑ〻てハ誠ゑ〻〻今我死と免ぐるゑ〻と得て後乃鑑と為り〻こゝハ實ふ神の大恩なり此事一ツゑ〻當ゑ真神を頌美べく一ツゑハ當ゑ真神を畏るべく又此羅得の妻のごゝハ永〻當ゑ念ふ留ゑ〻なゑ

義河ハ詩六十五篇九生命水黙示廿二章一

時ふ我夢ふ基督徒と美徒の二徒ゲ前ゑ進んで一ツの美ハしき河の處ふ到るを見たゑ大辟王ハ此河を名づけて耶和華の川といひ約翰ハ之を名づけ〻生命水の河となせり今彼等の天路ゲ丁度此河ゑ添るが故ふ二徒ハ此處ゑ至る時行こと甚だ樂其川の水と飲ゑ清〻して甘く人の氣力を壯んゑ世ゑまゑ〻河の両旁ふハ樹乃りて其色ハ青く多くの菓を結び葉ハ藥となるゆへゑ行人の病を治むべく。また川の両旁ハ皆草原ふして中ゑハ種々乃奇花ありて四季ともふ草ハ緑ふ花ハ開くゑ時ふ二徒ハ草原の中ふ偃臥て睡り〻ゲ此處ハ安く臥らまゑて危こと〻なけまゲハ二徒ハ此處ゑあつく臥たり起ゑり〻彼の菓と摘て食ひ復その水を

飲而して復睡るなど數昼夜のたひぶ此のおもむきあり

路旁生命水清流　天路行人喜暫留
百菓奇花供悦樂　吾儕幸得此埔遊

二徒ハ今此處ふ至るゝ雖ども尚その前ふ行べきの路あれハ乃ち復菓と食ひ水を飲て進こたり。其時我夢のうちふ見て居まで彼の二徒ハ前ふむうつて未だ遠くも行ぬうち其路ハ次第ふ川ををれ遠ざかるふぞ二徒ハ之を見て大いゝ憂悶をいだ切なり然れども此時ハ未だ正路を離れゝ事ハ非るゲごゝ。扨川を離るゝの所ハ路ゲ甚ぶ難渋ふして殊ふ已の足ハ勞たれバ二徒ハ之ゲ為ふ意を喪失て何卒一ッの平坦ある路を得たきものゝ思ひ進むうち適ゝ其まへに一ッの芝原ありて其名を旁徑といひ天路の左ふ傍ひ柵門ありて入るへくれだ二徒此所ふいるゝ時基督徒ハ美徒ふ向ふて「基此芝原路ハ本路ふ同じゝ並びたる様ふれバあの路ふりて進むふ若しのごと。其門ふ至りて窺ひ見まバ旁徑ありて天路ふ同途ふ似たれバ遂ふ美徒ふむかひ此路ハ丁度我意ふかなりて行き易けきバ同行ふ此路ふりて往ふ若しのゞ「美此路ふ往て路を失ハまゝきや「基決て爾試ふ之を見るべゝ前乃路ふ同じ向ふ行くまやと。美徒ハ乃ち其言ふ從ひ基督徒の後ふつき柵門を入て共ふ是處と行きゝゲ此徑ハ固より平坦ふして行やすゝ亦一人の自是しゝる人前ふ立て進みゝゲ二徒ハ

呼かけ〳〵問ていはやう「二徒此より往ハ何れの所に至るや」自是此徑ハ即ち天路に達くものゝ其時基督徒ハ義徒にいふやう「基我が前にいひし言ハ誠に是なり我が少しも謬らさるを知るべし」と是ゆゑに漸く進こと自是に從ふ〳〵往〳〵ゞ間もなく日落て黒暗くなる前途ゞ少しも見へさる故に前に立て進こと自是ハ忽ち深き陷のうちに陷いるなり但し此陷ハ是所の主が設けおかれしもの也時に彼の自是の如き自術ものと擄ふせんとなり其音を聞き大聲に呼んで何故なるやと問ども答ふる者なし唯長嘆息のこゑをきくのみなり「美此所ハいかなる所ぞや基督徒ハ黙然として何も答へず如何とかれバ已ゲ手引して此所にいたりしに今その非を知ゆへなり時に雨風雷電大いに作り水漸く高張あがりて美徒嘆息して曰るやう哀しひかな斯行ふ〳〵誤り〳〵こゝに「基此徑に從ひて斯の如きの事に出遇こと誰も夫し知らざりしか「義我先に斯ることの有んと慮ひし故少し其言をなかせ若し君が我より長ぜるかゆゑに我を必らず詳に其非を言べきものを「基君怒ることかれ爾を手引して此難難に陥ハ我心乃甚だ憂る所なり然ども固意にあらざれバ唯祈て我を恕せよ「義兄心を寛やかに持なまへ我ハ爾を責ざる也夫この苦に陥ハ悉く益を獲ることあんん爾之

心向大路耶利米三十一章廿一節

と信ずべし「基幸こ兄のおくき寛宏なる同行者を得しハ我心の甚ぶ喜慶なり但吾儕切こ此所こ立べくべく急こ轉回をなもへ如何こ美若し然ハ我ままに先こ行べし「基不可我當こ先こ行べし「基不可我當こ先こ行べ「美今爾の心憂忙なれバ行諸々の危あつて逢ふべくハ我先之を受べし如何こなれど我路を失ひしハ我等の罪ふかれもなり「美今爾の心憂忙なれバ或ひハ重ねこ路を失ふこもなり計りがこ爾ハ先ふ歩べくべく其時聲ありて曰く爾當こ轉じて往心大路こむかへべし即爾が前行乃路なりト二徒ハ此と聞て益こ轉回せんこ欲まれども此時水漲こ深くして大いこ帰路こ險みるなり。時ふ我夢ていうちこ基督徒こ美徒が正途こ出かぬる様子と見

絶望三字怖畏羅尼迦四章十三節出り又タ箴言十九章廿節

て自知ふこうこ何故こ正途と離るこハ易くして迷ひの途こ出ることハ斯く難ひやと其時二徒ハ險きを冒して返ることを要めんこまる様なれども但その路甚こ黒暗して水まこく高漲こハ之ごためこ溺まて死せんこまることこ數次力と盡こ智恵とつくまといども此夜尚扉門まで至ることかなまず其後一ツの稍休息きべ所場所と見こを暫こ此所ふ坐りて夜の明ると待いたるふ兼ての疲倦ふこり忽まち睡りを催うこなり扱この所こり遠くまれぬ所こ一ツの寨ありて其名と疑寨こいひ其主人ハ絶望こいて甚ぶ強兇人なり。時こ二徒が睡りなる所い丁度彼の界内なりこのハ此朝寨の主ハ早起して其境内を

獄内暗且臭ナリ筆者親歴スル所ノ情憐ベシ

散歩〳〵して不圖二人己の境内に臨れると見て大喝ふ之を呼醒し何の所より來り又何ゆへ我領地に臨るやと問ふ「二徒我等兵〻天路を行ものなるが路を踏はづし此處に至りしなり」「絶望汝ら夜分に我領分を侵し我境内を臨しゐて外不埒なりいざ我と共に來るべしと」絶望い身の丈たゞ力大ふして二徒ハ如何とも為べきようなく之を随がて往き自ら其過ちを知るいへども亦何ともいふべきの言もなく絶望ふ追たてゝ引て進こゝぶやゞ〳〵疑塞の内に引れ〳〵獄のうちに囚れ〳〵獄の内ハ暗く且臭くして甚ふ二人の心を樂しめざりしなり

路澁斯徒痛足酸　旁行草徑樂身安

因而失路遭危苦　離正方知返正難

粤ふ禮拜三より六さいるを日數あること〳〵四日二徒ハ是處ふ囚れて一滴の飲べき水もなく一粒の食ふべき食物もなく日の光を見ず一人も來て安きを問ふものなく其親戚故舊ハ皆遠くへだゝりゝば二徒ハ情ハ益〳〵愴まゝく此事のおもりハ皆基督徒の過ちゝゝ出ゝともつゝ基督徒ハ義徒ゝりも一倍まさりて憂苦たり扨ゝ絶望ふハ一人の弗信ゝ名ふ妻ありゝゝが日の暮るゝ迄絶望ハ妻ふむかひて二人の者が我が境を侵ゝたるゆへ我ハ捕れと獄ゝ囚へおけるが今何ともつゝ之と處べきやゝいハ其妻ハ答へゝ其者ハ何人ふてまゝ何より何へ往ゝ者なるや。絶望ハ悉ゝその情とつげ

おうだ其妻まさいふやうに明日い早起して重く彼と打決て憐
憫たまふやいふ之さやうつ〳〵絶望い平旦おきるや否や獄さいり
て二徒を鞭し狗ころの如く二人い忍でおれを受默つ〳〵語ね
ばも彼いまだ〳〵重打すぐ身い地に伏て動きえぎ其後絶
望いまの所さを去り二徒い獄中さありて其苦惨と悲こ惟嘆
息し哀慟をもつ〳〵其日をおくりぬ。然るに其夜彼の妻ある弗信
者二徒乃いまぐ死なぐることを知りて其夫さ曰まう汝彼等に
自殺を命ぜ〳〵と故ふ絶望い夜明さ復び二徒の處さ近づき
怒きる色ふ〳〵昨日鞭たる傷所の痛〳〵げなると見やりて遂さ
之さ謂るやう爾ハ永く此を出ることかなはざるひ

約百七章十五節
曰願果此微軀而就死地已無樂生之心不作永存之想畢生遊難毋

縄を以ひまさハ毒と服して急さ自殺まべ〳〵又いまさ汝斯く苦
惨ふあひなぐ〳〵何ゆへ生て死せざるを欲まるがごとくなるや。時ふ二徒
ハ釈放なゆへし求めしふ彼ハまだ〳〵怒きて其前ふ突逼て斃さ
んしせり此時若しも彼に急病が起りて四肢がかかはざるふ非ん
で必らず為さ斃さるべきなり如何にとれバ絶望にハ天晴日
朗なるべ〳〵昏癇疾をもてバなり故ふ此時二徒を離さて去り
両人ふ自度て從ふことを決めさせ〳〵ばハ是さおいて二徒と絶
望ぶいへる處の事を互ひに談りあひぬ「基我儕ハ如何なるべ
きや今斯のごとの惨苦ゆれバ生るがまし〳〵死まるがまし〳〵か知
るべ〳〵ぐ且我ぐのいの獄ふある墓さ行るるやも惨しくれバイツソ

寧人舍予篇第

死して絶望の言ふ從がふべ〜なん「羨今の苦しき情ハ誠に畏るべく我も若し永く此のおそろしきなかにて生てあるよりも死する方がましなん然まこの今我〜ハ天國に往んとするものなり天國の主がいへる言ふ人と殺すこと〜なのまこと人でさへも殺して悪きものハ況てや人の言を聽て自殺ものとや且人を殺すハ其身と殺すまでふりて其靈魂を殺すこと能ねども自殺のごと死ハ其身と殺すに並びに靈魂をも殺すなり兄の言ふ獄さ云るなれども能く思ひたまへ死するのハ墓なるも慘しひと云るなれども能く思ひたまへ死するの後示かるゝぞ地獄ありこの所ハ即ち人と殺す者のいる處蓋し聖書に曰く人と殺す者ハかぎりなき永生を得ぞと今絶

加殺人出埃及記廿章十三節

聖書五々加奈十章廿一節

望の力大いなりとも必ず全たき權なし彼ふ捉まるゝとも度ふ〜亦彼の手を脱るゝあるべし且真神ハ能くせざるこなれば或ハ將ま此絶望を滅ぼしたまふべし且まゝ此獄門時として守ることなし或ひハまゝ彼絶望我が前さあつく疾復びおもり四肢のかゝハぎるこなるやも計ぞ若し果して斯のごとまふあハば我ら力をつくして彼の手を脱し得るや否やと試〜んゝ欲まるなり前ふ彼が病のおこりし時我これを行ふかぎりしハ誠さ不知なりしこと多し但し如何樣のこと多なりとも自殺まることくハ甚だしきまで當さ自ら強く忍ぶべきなり一時の苦しみを忍へなば或ひハ脱るゝの時もやあるゝんゝ美徒ハ

ふの言をのべ〳〵稍基督徒の心を安んじたり故ふ此日二徒ハ暗乃中ゆゑにうて其情ハ實ニ憐むべく哀むべし。

偖も基督徒と美徒ハ両人ハ獄ゆゑにとなりて寂々日も既に暮んとする折ふし絶望復び獄中ニ入り來りて二徒ゝの已の言葉ニ従ひしや否やと見んとおもへり其時二徒ハ尚活たれども久しく飲食せぬうへニ鞭撻身ふ重傷をうけたればバ只一線の呼吸と存まるのみ然るふ絶望ハ其死せざるを見て大ゆ怒り二徒ゝ其言に従ゝハざるを責め必らず重犯苦しみを加へて其生るも死ゆ如ざらしめんと言り二徒ハ此言を聞て戰慄基督徒ハ暫し昏失ゝて人事も有ざるゝ頃ゝあつて甦へり絶望のいひしことを以ゝ復び羞徒と相談しまゝ決めかねゝ居たりしゝ其うち基督徒ハ絶望の言ふ從ゝがたんとする様子なれど羞徒ハ基督徒にむゝ「羞兄ハ日おろ甚ゝ大膽なるゝ今何ゆへ其事を忘れしや。彼の亜波淪さへも爾と戰て勝てなゝば亦死の蔭谷ふおいゝても爾ゝの見るとおろ聞とおろ乃諸の危ゝ懼しきこゝゝの爾を屈撓てなゝむ兄ハ皆ふ毒を味ちひしふ何故今ハその様ゝ臆病なるや我も素ゝ爾ゝ弱きふ今爾ゝ我ゝ此獄中にとゝまれ絶望の爲ゝ傷められ飲食まで絶まし暗中に哀哭ことハ爾と小しも異なるゝ然まども我ハ強ゝ忍んゝ待べしゝおもへり且兄虚華市ゆてハ甚ゝ剛勇鏈の鏈すて囚

時ヲ待ツ傳道三章

世人婦言ヲ惟聽用ル者多シ

況ヤ絶望ヲ乎

疑懼トイヒ絶望トイヒ弗信トイフ甚タ怪リ易シ一トタヒ疑ヒノ門ニ入リ返正コ知ラザレバ天路ノ望ハ絶果テ彼ノ絶望ノ淵ノ一橋ニセラレ裂碎ルナリ絶望ト弗信ハ同等ニ体ナリ此ノ一段ノ脚色ハ其演戯場ハ何ノ所ニ在ルヤト問ヘハ丹田ト云所ニテ即チ他人ノ一ニ非ス我ガ方寸ノ間ニ於テ信ト疑ト接戰スルヲ描出ヒタル者

籠酷き刑罰ふ及ぶとも懼まじ〳〵ぬるまぢや今我等ハ力盡尽し強くたへ忍んで時節を待可なり此して縱へ脫るゝとも亦自殺して聖徒の名を辱しむべからもとも是夜絶望の妻なる弗信ハ復ひ其夫ふむひ二徒ハ我等のいひ付を隨がひしや否と問ふにゼッタ彼の二徒ハ甚ぶ强悍者ゆゑもろ〳〵の苦を受るといへども絶て自殺まることを甘まぜ一妻明日ハ彼等を曳いぶして仕置場へ連往ん前に爾ハ撒されたる者の屍首をもつて彼等にみせ迫きうち此者等のぶ〳〵其身を裂るべしといひなゆへ困て絶望ハ朝早く起き復二徒の處へ行之と曳いぶして城の庭へ連れ往き妻のいひ〳〵ぶ〳〵して曰ふう爾ぶ今見

るこころ屍首ハ皆天路を行者ゆゑ爾のぶ〳〵我ガ境を侵し其身ハ我ガ心のまゝふ裂碎たり爾ぢもまゝ未幾此様ゝ滅さるべし〳〵て遂に二徒を喝つけ〳〵之と鞭撻て一筋路を追ひ入りた是日土曜日二徒ハ獄ふいりて悽慘故のぶ〳〵其夜弗信ハ其夫〳〵談して二徒のこゝ〳〵及び〳〵ぶ絶望ハ言ふ我様ともつて之と鞭うち言を以て之を逼るゝ〳〵彼等の終ハ自殺せざるハ實ハ解せざるゝあり「妻其〳〵に彼等の死せざるハ恐らくハ別の望こありて他人ぶ來りて救ふゝの或ひハ自分に論あり此を以〳〵逃ゝ出んゝを冀ふん」「絶賢妻ガ之ヘる通り必ず夫等のこゝあるべれバ明朝ハ我ガ〳〵ず細小彼等の身を探り

ノ用意想ヒ又ハ小信・皆ノ成トイヘキヲ皆実理実事ナリ假設虚造ノ詞ニハ非ルユリ

見んと語りあひぬ。扨此夜彼の二徒ハ真神に祈禱夜の明んとする頃までも祈禱やまざりしの天明の頃に基督徒ハ忽ち夢のさめて覚しが如き心地にて自ら悟て曰るよう我既に飲く自由なるに斯る臭き獄のうちに忍んで居ることの愚さ我ら懐中小恩許の鑰匙あまた必ず之にて此疑塞の門を開得べし其様の事なれば之を越たる事ハなし いざ急ぎ取出して試んなへ是時基督徒ハ彼鑰を取いだして獄の門を開ん とするや否や戸さ忽ち開け ぬ 二徒ハ此慶を奔りいで中門さいなりても復此鑰をもつて開き後外かまひの門に至り此門さへ開けば全く脱出らるべかれども此門ハ鉄門にて啓き

疑團ノ狀キ難キヲ如此シ数重ノ門アリ又其上ニ鉄門アリ

敦日番マデ敦ハ扉ヲ拉スノ気力トカンヘシニ徒ノ情発尽カハ神ノ威力ヲ下シ賜ニアラザレバ如此ナルベカラズ 又只此ノ意ハ信者ニアラザレバ悟リ能ハサル所ナリ

かゝ然るに二徒ハまゝ此鑰をもつて終に之を啓き急きて逃出んと力を尽して扉を推たるに此聲絶望を驚醒せしが突然起ゆゝ二徒を追留んとせしを計らずも絶望ハ此時疾くゝ作りて手足ハ力なく一寸も歩を得ねば二徒ハ急き奔つて元の柵門まで復び天路さ入りて危難を免るゝことを得ん 蓋しこの地ハ絶望の来るまでかるいざる所也二徒ハ幸に此に来ることを得互ひに相談して曰るよう後に来る者ハ旁徑ふらつき往迷重ねて絶望の爲に獲ぬよう如何なる法を以て示すべきやと遂に議て一ツの石碑をたて此柵門よりハ直に疑塞に通くものなりて内ハ絶望と云る強兇者あるて主を藐視其徒を戒賊ふな

疑とハ恐レ生ス疑惑ヲ出テ樂山ニ到ノ順序然可ナリ

且つ行人ハ此ゝゝて往こなゝれ又一詩を列ねく

詩云

人行禁地實多危　一入旁途即自知
絶望捉余囚暗獄　吾今得脱立新碑

後あの地を行くゝもの之を讀でおほく危ケを免まゝさいゝ
扨基督徒ゝ美徒ハ再ひ天路ゝ從ふて行き樂山ゝいへる山ゝ至る
又此山の主ハ即ち美宮山の主なり時ふ二徒此山ふのぼりて見た
る花菓の園湧出の泉ありて其水ハ之を飲んで渇を止めゝ體
をゝゝゝゝべゝ其菓ハ意のまゝふ之を摘で食ふべゝまゝ山上路旁
ふは適ゝ羊を飼の所乃牧者ありゝ立ちれば二徒ハ其側に

以馬内利ハ實亜書七章十四節又馬太傳一章廿三節

天民之外ノ各ハ牧者ニ非ザレハ言ヒ出ス能ハズ

ゝゝ時ゝ身も倦ゝまゝ杖ゝゝれゝゝゝ彼ふ問ふていふゝう此山
の主ハ誰なるや山の草を食ゝる羊ハ誰のもゝなるや牧者答へるハ
此山ハ以馬内利（譯まれを神我ゝ偕なるの意ふゝく耶蘇乃名なり）
の地ふて此處ゝり望めハ其城を見らるべくまゝ此羊ハ悉ゝ彼れ
物にして彼ハ諸々羊のた免ゝ生命を舍ゝなり「基此所ゝ由ても
くハ即ち天國（至るべきの路なり）「牧まゝこゝふ然り」「基此ゝり天
國ゝ至るの路ハ何程あるや「牧若ゝも此路の遠さと論じなゝ
天民の外ハ必ず其遠きを憚るべゝ「基其路ハ安らかるや抑危險
や「牧信者ハ之を履に危きゝあゝ但道ゝ逆ふ者必ず其中に
跌こん（何西書十章九）「基行人が此ゝ来て力倦思つゝゝ時之

遠人・羅馬書十二章十三節又希伯来書十三章二節

心真ニ道ヲ樂ミ喜悅ノ顏ヲ以テ牧師ヲ見ルモ、蓋シ鮮シ外面假急ノ者ハ牧師之ヲ見テ其肺肝ヲ知ル

智識練達学ノ諸賢ニ非レハ樂地ニ立ツ能ハズ

この為の宿屋あるや」牧此山の主ゞ我ゞ曰るゝよう遠方ゝ人と念頃にまゝると忘る勿まこ今まの處乃物ハ慈く爾の前ゝ具へて爾の心のまゝにまるゝくを聽まゝ、牧者又二徒に問て曰く爾ハ何ゝよう来しゆゝ何ゝよう此路ゝ入りて能く久ゝく行今まの所ゝ至りしや蓋此路に入もの能この所ゝ来り此山中においゝ我ゝ其面と見せ者鮮かゝ。二徒ハ始ゝりの事をもつゝ一々ゝれに告ゝかゞ牧者ハ之を聞て甚ゞ悅怡顏ゝて曰るゝよう爾まの山ゝ来しハ我ゞ心と喜せたり。時ゝ諸の牧者即ち智識練達謹守誠實等ハ二徒の手と取て帷幕の内ゝ引入備へたる物ともつて之ゝ食ませ又之ゝ請て暫く留まらせる數日互ひゝ熟識ことゝと得ぱもゝ此山ゝ

樂を享たり二徒も亦願ふゝ之ゞ為ゝ留り是夜まゝてゝ深れハ二徒ハ寢につきたりしゝ夜の明ごろ諸の牧者ハ二徒を起して共ゝこの山ゝ遊び四方の美しきゝ景色を觀週遊んで居たりしゝ時に牧者互ゝ告て曰ける〻數所の異蹟を我等此行人ゝ示まべしゝと乃ち二徒を引て一ツの山ゝ登たゝ此山の名ハ異端といひて其山の後ハ甚ゞ高斜ゝり二徒ハ俯して山の下ゝ骸骨のあるを見ゝり之皆山のうゝより墜しゝ者ゝて骨身を打碎かまたり「基これハ何ゝ」牧むゝ「許米乃。腓里徒妄りゝ復生の事を言て虛誕とな」又その說ゝ從ゝ者あつゝ遂ゝ道ゝ背きたり（提摩太後二章十七八）爾ハいまゞこの事を聞まりしゝや二徒その事ハ我ら

復生の事と妄りゝ言つて虛となも妄言妄証ノ成ヲ侵せり且ツ聖書中ニ於テ其意味ノ明了ニ理解ヒサル事ヲ輕

卒ニ説クヲカラスト公會條例ニ掲ケタリ其ノ意味ハ閫外人ノ知ル所ニアラス讀者疑フヿアラハ師ニ就テ正スベシ

高きは過ぎ難頂くいふれたり
ハたゝ讀者
業を拍つへし

左道ノ柵門

も亦聞およびたり「牧山下の碎れたる骨ハ即ち此人なり今小尚彼を墓に埋めざる者ハ之をもつて後の戒めとなす人を」て高知ふまぐるてなり異端の絶頂に近づゐぬよう為しなり牧者ハ復び二徒と連て警戒といへる一ツの山に登り二徒ハ遥ふ遠くを視るに数人あり亂墓の間を往來するふ似たり其者等ハみな目盲にて昏迷と毎も躓跌く墓所といづることなくなす「基此ハ何故ぞや「牧此山を下りて遠くもなく道の左に一ツの柵門あり其より入ハ其道ハ草原なり爾い未だ之と見ざるや「徒之を知るより「牧其門より入るハ直ふ疑寨に通り絶望といへる完強者あり此城を守る墓の間を行数人ハ先に皆天路を

所羅門歳言廿一章十六節

行く者なり彼柵門ふ至りおろ路の甚だ難渋よりて行かぬ知ふり乃ち草原に入り絶望のためふ獲となり疑寨ふ囚まるるの後その目を抉て之を此墓所に放ち茫々途に迷て今に至るまぐ出ることを得ず此一事ハ猶所羅門の「智明の道を舎れハ必ら迷群死の中に居るといへるが如し」時ふ二徒ハ前情を思ひ感じて互ひり涕を流したり

時に我夢ふ見ておもへ牧者ハ基督徒と美徒の二徒を連て復び山の下なる門のなる所に至り此門を啓きて二徒ふ視させり中ハ悲く幽暗ありて四方に火烟あり其ハ烈火の聲慘哭の音硫黄の味ふどを恍聞ゆ「基此ハ何ゆへなるや「牧此ハ

地獄、私門
雲間捷徑 妙對
以掃創世記廿五章卅三節
猶太馬太廿六章十五六
亜力山提摩太後四章十四節
亜拿尼亜使徒行傳五章二三節

乃ち地獄の私門ふて諸の偽善者の入る所ゝり以掃ふなゝゝて其長子の業と賣者猶太ふ效ふて救主と賣者銅匠亜力山大ふならぬく福音を謗讀者亜拿尼亜と其妻撒非喇ふなゝふて謊言を裝飾者の若ゝ「美我此等の人と觀るふ各く天路を行こゝハ固ゝり我輩ふ似て同じ旅衣をもちゐるゝり「牧彼の天路をいくハ久ゝかゝ紀「美彼ハ何ほどの遠きまで行きて酷亡なるや「牧行こゝ此山を過ゝ者ゝり亦きの山ふ及ざる者あゝ。其時二徒互ふ勸ていへるゝり吾儕ハ切ふ主の力と我ふ賜ハらんことを求むべきなり「牧然ゝり爾主の力を得ハ又ままふ之と用うべゝ。時ふ二徒も前行こゝと欲ゝ牧者もまゝ此のこゝ紀を願ふて遂ゝ之と送

ゝ山後ふいゝり者ゝり

斯徒竟至樂山場　中有牧師飼羊羊
且驚且喜得平康

歴示二徒諸往鑑

時に牧者ハ互ふ相かゝうて曰ゝう「今天國乃門をこゝるべき我ふ千里鏡ゝりれバ此行人ゝ借て一觀せゝむるハ善ゝゝ。ゝやト二徒ハ之を欣領ゝく乃ち牧者ふ連らゝて清景ゝ名づけたる一ツの高山ふいたり彼の千里鏡ともつゝ二徒ゝ交ゝれバ二徒ハ千里鏡と執て觀。兼て見ゝ所の諸情ふ思及ひゝうハ此時心おゝろき手慄へて定視るゝ能ハざりゝ然ゝども稍ゝその城の栄耀と見ゝ其門ともふ微見えたり「二徒ハ觀託て乃ハち復

前行

智識練達牧之名　人所難知彼解明
我到樂山逢此輩　觀諸奥妙益吾情

二徒ハ將ふ起程せんとする時諸の牧者のうち一人ハ路程誌録とあるへ一人ハ謹で諂媚者と防げ〻戒しめ一人ハ迷氣地中ふて必ず睡るなかれと戒しめ一人ハ其安と祝ふ〻主一路爾偕なんことを願ふ〻いへり此に至りて我夢乃ち醒たり」後ふ睡て復夢こ彼二徒と見るふ此時漸く山と下ア天城ふむふて往稍ふの山を左ヨ離ヨ所ふ自滿く名づくる地あア此内ヨ一ツの徑ありて小き〻且曲りたるが側より天路ふ入れり二徒ハ此の徑の小口に至り一時適〻一人の年少者に遇ひ彼の體態輕率しく其名を無知といへる者が是地より來まり基督徒彼ふむふて何より來り何へ往やと問ふ「無知余ハ此山の左ふ生長せ者あるが今天城に往んとまるまるなり「基君ハ如何ふ思ひ玉ふや天國に入らんと思ひ玉ふ天國ヨ入ることハ甚ぶ難きこと〻思ひ玉ハぶや「無善人ハ入ることの成かれバ余こそも入ることの出來ぬこと〻ハ「基君が若しも天城ふ到る時ハ何ある憑據ありて其門ふいり玉ふや「無吾ご主乃命と我ハ知まり我ハ素より善こと〻を行ひ義ともつく人と待らひ祈禱斷食家資を以て聖會を助け貧乏人と濟ひ今〻

己の本邑をまて〜天城ゑ行んとまるゐり「基君ハ此路へ入來に何故窄門ふ由らぎーて曲徑ゐり入ゑ〜や今自ゐ〜天國さ入ることと許まそとも誠さおそゐく、審判の期ゆかゐ〜ぎ爾を視て賊〜なり〜豈彼城に爾の入ることと許さるべき「無君等ハまことに我を知ざるゐり且素ゐり互さ識らぬなゐるまで爾ハ爾の教さ從ゐひ我ハゑゐ教さまさがきん我おそふさ万さ一ツも失策ハなゐるべ〜爾のいく窄門ゐるものハ世の人乃知ざ〜吾邑と隔ゐるゐ〜こと〜甚ざ遠けまで此門ゐ〜至るゑ路ハ我邑の者一人も識者なり〜然まゐも此亦何のぎまさけあんや如何ゐ〜ゆれで我ゐ來ゐり〜徑ハ捷徑ゐて行やまく稍正路と同ゐ〜けまでなり是さおいゐ〜基督徒ハ斯く彼の自ゐゐ是とまる様見て遂ゐ語と低〜て美徒ゐ曰ゐゐ聖書ゐ曰くゐ愚蠢なるの輩ハ尚のそむべき有りト（箴言廿六章十二）此人ゐ至てハ則ち望なり又曰ゐ凡そ無知ゐる者一ト度び諸途ゐいづまば智識足らぎーて若〜人と言てゐまば即ち其無知を露ハせゐ（傳道書十章三）我今何ある法さて此人と處をんや彼と復言〜まべきゐ。抑〜之をまて〜先ゆ。彼を〜て我ゐ言を思ま〜め。後その來るをまゐて漸〜之を勸めば或ハ能く悔ひ改むることゐりて益をゐくべきゐ。我ゐ慈ふさ今一時ゐ彼といひ盡まことハいまさ可かぎ〜で暫く彼ゐ先だつ〜往ゆ後ゑ若〜いべき折ゐ〜ハ其時まさ言べ〜」

人生自満實無知　輕棄正言即自欺
若果執迷終不悟　届期審判不憐之

偖も基督徒し美徒の二徒ハ夫より進んで前々行処無知もまゝ
のくより隨ひしが未だ遠くも行ぬうち一筋の陰徑に差ゆくし
み此所みゝ或る人が七邪神と七ッの縄をもつゝ縛らを直ゝく
み山の下乃門と向ふゝ曳を段々二徒の方に近づきしかも二徒
ハ之を視て大いに懼れ戰慄して居るうしこの基督徒ハ之を
視て意ふゝう是ハ棄信郡の背道なるべゝ。然るに彼ハ
盗賊の捕はれし如く其首を垂れて通りしゝ分明ゝそれ
とも觀定めがゝうり志が彼が通り過ぎてのち美徒ハ廻視

此三賊日々吾輩ノ室門ヲ窺フ

て彼の背上を見るに文字ありて云ふ「此れ外ハ聖徒なれども
實ハ淫悪みして道を背くが為永ゝ刑罰を受べく定まりたり」
と。時ゝ基督徒ハ美徒ゝ向ふゝ曰ゝ今遇ところの事みうう我ハ
一人の善徒と思ひ出せり此ハ其名を小信といひて心誠郷よりし
しが彼も亦我們のごとく天路と行ゝんとゝ此陰徑ゝ入りたり
然るみ又別に一ッの徑ありて直ゝ閑路みゝ通り其名を殺徑といへ
り其譯ハ常ゝ此處みおいゝ人の殺さゝ故なり時ゝ小信ハ其處
みゝ坐て睡りけるゝ適く三人の強賊あり其名を懦志。疑心。罪
車。なゝくいくる者濶路より下りて殺徑に入り小信が此所に
睡まるを見て其方へ近づけるり此時小信ハ目を覚して起き

あがり復び前ゝ進まんとせしふ彼の三人ハ側ゝ近づき之を嚇りつけて曰く此ふ立て。小信之を聞て貌驚し走もゝ逃ねハ。敵たゝ事も出来ず青くなつゝ居らしかど懦志の曰金を出せ。小信ハ甚ゞ其金と失ふことを願ずして延緩して出さねバ。疑心も逼りて之ゝ近づき手を其懐ふ入まて探りまハし囊中より其金一鈷と奪取たり。小信ハ大聲に呼ハりて盗賊〳〵といふ是ゝおぬ〳〵罪辜ハ大杖を以て其首を撃ちて地ゝ顛仆暫しの間ハ血流れ出て大方死たる有様なるゝ時ふ遥かゝ人聲ありて此處ふ來りる者ハ篤信郷の崇恩なゝ〳〵かバ彼の三人ハ盗賊ハ小信を遺して足疾ゝ脱去り暫〳〵て小信ハ大方愈

ろゞ勉強して前行ゝ

懦疑與羅賊靈魂
幸有崇恩居篤信

擊小信徒命僅存
崇恩一至賊皆奔

其時美徒ハ基督徒ゝ向ひて「羨時ゝ三人の盗賊ハ〳〵ゝ其物と奪つゝせ」や「基否〳〵小信ゞ持たる寶石の在所ハ盗賊ゞ捜り得ざりし故ゝ其寶石ハ残りたり然し此損失のたゝ小信ハ大いゝ悲しめり如何となれゞ賊の為ゝ彼の路用と奪れ唯奪れざりし物ハ寶石と其外ゝ端銭ゞ僅ゞ残るのゝかれゞ此金で小信の旅と終らんこゝハ甚ゞ六ケ敷且まゝ彼の寶石ハ決して責こゝのなゝぬ者ゝ人ふ命をつゞ為ふハ亡

初非人力提撕太後一章十四節

彼不失此宝彼得前一章九節此引証ニテ宝トハ霊魂ノ事ナルヲ知ル

食とせねばならぬようふ終に空腹ゆゑ乞食ともがら残りの道を歩こなり一義小信の手ゆゑ天國に入るべきの證文あらん盗賊ゞ夫をと奪ハざりしハ實に不思議のこゝゆゑや「基誠に不思議なる事なり然し盗賊ゞ此寶石を見付て取ざりしハ小信の智慧によるに非ず如何ゆゑれぞ小信ゞ賊に出遇し時ハ甚ぶ恐懼て本心をも失ひ程なれバ中々其物を藏したりまるる力も手間もなりしれハ此寶石を賊ゞ奪ハざりしハ全くもつて人の力ゆゑ實に天の恩なり「美小信ハ其寶石を失ハざれバ夫に依て心を慰さめしゆん「基若しも小信ゞ此寶石を飽までも善く用ゆゑ其用ゐ方を失ひハざりしゆ

漢書ニ云ク德ハ本ナリ財ハ末ナリ

此一段ノ文意ハ小信カ信德ハ小ナレ共尊ノ可タ且ツ愛ス可キ事ナリ然レ共其信ノ小ナルヲ以テ大信ニ比ヲ以テ比ヲ盗難ニ遭ハ一ツ階ハ又盗難ニ遭ハ

らば小信ゆ取て大いなる慰しもなるべくを但或人の云ふゆ小信ハ金と盗まれし時の驚れ終に寶石の用方と大方ゆ失ひし程ゆて寶石ハ存りても此旅路ゆ於て毎々寶石ゆ在ることと忘きなり然し時ハ其の寶石と思ひ出して心に慰さめとおもふ時ハれども又その盗賊よあるこを思ひ出して慰ハ轉て憂ひとなりたる「美此人ハ何故そのゆうゆ憂ふるる誠に哀しきゆゑなり「基然ハ其憂ひハ實に甚ぶしうれ若しも我等ゞ他國ゆ在て盗賊に出遭金をとられ身體に傷を蒙りしゆゑで其憂ひハ亦彼に同じかるべし故に小信ゞ此難に遭ひ憂ひて死せで何ぞも不思議のことに非ず當然のことも也人の

言ヘリト云ヒ兼テ現世ノ人々安ク難ニ逢ヒト心得テ居テ説キ出ス故其文詞ノ含ム所ロ多クシテ流暢ナラズ言詞ノ流レヲ覚エニ似タル所アリ此レ著者先生ノ用意ノ奥ヤリ首尾整ハズ隔ニ遍ヘ看過ヒ勿レ

言ふ彼の小信ハ其後旅する時惟哀歎悲苦するのみ〻路中で人ゝ出遇バ一々語りて云ふよう何處ゝあり〻時如何なる賊に遇ひ如何なる物を奪れ傷とられ大方小命を喪なんとせり「義左程ゝ困りしなるべ彼ゞ持ところの寶石と質小置しとうまゝ賣拂ふこの志ゞ何故ゝ旅の路用を補なハざりしや」基爾の言葉ハ未だ殼と脱せざる黄雛小異ゝなるなり夫れ何を求めんとて此寶を賣んとするや賊ゝ遇ひ所ゝて ハ此寶石を寶ゝせず故ゝ此寶石を賣て路用ゝ備ふるゝ難し蓋し天城に至るとも此寶石と持つゝ行ゝざれバ天業を受嗣ことゝ得ず故ゝ小信の心でハ天業の受らるゝぬハ萬度も賊ゝ出遇ハ大いゝ困難とおもひ「義兄弟ヨ何故汝ハ左様に我ゞ言を辛く折るや以掃長子なる時饑て一飯のため長子の家督を賣ゝり此長子の家督ハ以掃の身ゝ取てハ第一の寶なり然るゝ以掃ハ之を賣ことを爲せり小信ハ何ゆゑ是を為ざりしや「基以掃ハ實ゝ長子の家督を賣り且此ゝなるして其様ゝ事を為ス者數多あれども其様ゝことを為し者ハ矢張以掃のようゝ永福を豪なりと今汝ハ以掃と小信との人ゝ為りと其持物ゝを區別まべきあり彼らの人ゝありも彼等ハ持物も大いゝ同じかゝ以掃ハ長子の家督ハ直の天ハ寶さいゝて天寶の表なり然し小信の寶を

以掃創世記二十五章二十三節
希百來書十二章十六節二哺啜ノ為メトアリ

實の天寶なり以掃ハ口や腹を主とするせども小信ハ左さ非ず以掃の嗜む處も血肉乃慾なれども小信さおいハ又左も非ず且以掃の心ハ慾ちた免さ蔽もれて遠く見ること能ずず如何ふと

信ハ小なれども尊ぶべし況や大信とや

ゆれど以掃の云ひ〜言ふ我ハ殆んど死せんとす我さ長子の家督ありても我さおいて何の益ひんや小信においてハ其信仰の至つ〜小さなれども以掃の様ふ法外の事となさん以掃ふ長子の業を賣り様さ小信ハ寶石を賣らむ益く夫を尊び見る様さなりなり。爾さ聖書の中さて何處ふても以掃に信ひることを讀み處あるまで然まさ彼さハ小なる信仰もなきあるを若し人さ信仰ぐるハ惟情慾の為さ使られ其

情慾ノ奴隷竟ノ子ト云ベシ

寶石ノ真曹

長子の家督も靈魂も殘らず賣て魔鬼に從ふ者なり是を奇とまるふ足らず心ふ情慾ふ陷ち如何なる者でも慾ち為く棄て去ますべども惟小信ふおいてハ專ら天物を好ま常ら天恩ふ。聖道を以て生を養ふへし。故ら人ふ若し信あるで縱令人ありて此寶を買んと求むるとも此大切なる寶石を賣ち其代りふ他の物あるや極めてなし。且如何なる人ふても腹をふくらを為めさ錢をひろして草さ易る者あるんや又鳩をバ如何ふ勸むるとも烏鴉の如く屍を食んさ〜ハ難ひ〜然まバ信仰なき者ハ情慾のため所有物おもひ靈魂までも皆賣能ふくべども信ある者ハ由〜其信ふ小なれども決して其様ふ事ハなさぬ

左ノ頃石ノ頃ハ義花も此時ニまれかりや

なり此をもつて見れば爾の言葉を大に謬まるなり。
其時美徒に云るゝ我も固より其事ハ知て居ども餘り爾の言
ゝうゞ嚴しきゆへ我々大いなる怒りをおこさせたり。基督徒
の曰く爾ハ鳥ゞ未ゞ殼を脱まらぬに路上を走るゞ如くなれども
然し此事ハ扨置て尚議論すべし「義我意ふゝ彼の三賊ハ臆
病者の仲間なるべし如何ゝかれば人の足音を聞さぞうで
走りしゆへなり且まゝ小信とても何故斯ゝふ懼れて大胆
なるや先敵ゝ戦ひ力ゝ出ずは其後之ゝ服ゞゝも遅
ゝざるものを「基人ゞ多く賊に臆病なることを言ども
已ゞ其場ふのぞみ之に遇しに此ハ此を言ものなし小信ハ固より
大胆なる者ふあゝ爾の言慮よりれば爾ゝも此賊に出遇しゝ
を一時争ふて後ふ從ゝべくハ從ゝべくしと然まども汝ハ彼賊ふ近
づくゞる故大胆なり若しも彼の賊ゞ小信に為しごとく汝に向ゝ
來るゝゝそ汝ゞ今の心ハ變るべし。能く考ふべし彼賊を旅人と苦
しむる者ふゝ其上に深淵と以王あり若し一チ大事あれば其王
忽ち來て賊の加勢をなす其聲ハ獅子の吼るゞ如し。我も一チ度小
信のゝうふ彼三賊に出遇しゆへ我ハ力をつくして禦ぎしふ其時
三賊一聲をたてば其王なちまち來て加勢をなしたり世俗に
云ふ如く其時ふハ我命ハ一錢の値もなりしゞ幸に真神の恩に
より身に堅甲あれば飽までも力を盡して防ぎしゞ然るも竟に

大闢撒母耳上十七章
鵠鵝之力豈藏及耕牛乎

及ばざる地實に個様の敵と抵抗する時の苦情は身に覚へある人でなければ知り難し「義若し其時に崇恩来らば彼賊等を王と共に逃去るべし」「基崇恩来らば彼等は走ることのなべし如何とかれば崇恩は我が主の大将なり然し小信と大将と此二ッの者は大に異なり主は幕下に多くの民あれども皆悉く大将ふかくぶれば諸々の敵に時々大将のように奇功を建るべく能はざるなり昔し太闢は坷利亜を殺せり此は凡ての小兒が皆能くし得る所に非ず婦鳥の力にて豈で田を耕すことを能くせんや聖徒の中にも或ひは力の強きあり或は力の弱きあり信仰の大なるあり小なるあり右小信のごときは固より

如人既什地有何能為耶ト知言ト云ベシ
昔崇恩ハ漢譯ニ昔保羅トヤリ
大辟夏娶告撒母耳下廿四章十節
希夏末考希世家列王紀下十八章

弱者なる故敵に遇て即ち敗れしなり義此三賊が崇恩と遇さるは惜敗となり「基縱令崇恩としても此賊に勝ちては亦難かるべし如何とかれば崇恩善くたゝひ両鋒相ひ抗の時に之を禦ぐとも若し懦志や疑心が其場に臨み来らば其敗を仕る事を免れ難し人若し地に仆るとかば何事をも為能ふまじ且崇恩の貌を見し人は必らず其面に傷痕のあるを見て我が言葉を實とまぐべし昔し崇恩戰中に時言々るを我生命を保の望と更に絶たりとまぐ此強き敵が大闢と憂苦せしめし事は如何ぞやとまぐ希曼と希洗家は主の大將なりしに賊に襲されしに如力とつくし

一 駑馬太廿六章六十九

我軍ハ賊ト同居スルアリ又賊ハ奴隷トナルアリ早タ此境ヲ出テ郷山ニ走ベシ窄門ニ入ルベシ

て防ぎなれども終に重く毆きたり且主の使徒こいたれし彼得きそ或時その能力を試んとして敵のために心を弱めるを卒に一人の下婢を恐るゝほどふいられ而して其賊の王ハ近き居りて賊等を呼時ハ何時でも聞える處に居きハ賊等ハ戦て負かける時ハ何時でも来りて賊を助ケ此王ハ實に強兇にして刃を以て切ても切まず鎗で突ても透らず甲冑も用に立ず鏃を蓬蒿の様に思ひ銅ハ枯木の様に見る矢を射ても恐まず石を投ても草さひゝ人ハ投矢をまれば藁ゝ戈と舞せで彼おほひふ笑ふ個様なる者に向つゝハ如何せむ勝るべきや倘人ハ約伯の馬に乗りて胆力を強くして防ぐは或ひハ秀逸たる

大言馬太廿六章三十三

功を建うべし（約百四十一章廿六以下。三十九章十九節）其馬の大略を

頸壯若雷霆　嘶時氣象猛　谷中歡逞力
陳上直衝兵　矢窓軍聲震　刀鋩鼓角鳴
此間危且險　馬躍罔知驚

汝や我等の如き者ハ彼の賊敵に出進こと決して喜ぶまじきなり且まゝ彼の敵に負ゝ者ハ汝ハ自慢して我ハ其敵に勝べゝと云ことなかれ若しも自慢して戦ふるゝハ其敗北を取こゝ前の人ゝも易うるべし前ゆいひごゝ彼得のこゝと思ひ見よ彼大いに大言をきて主に誇り衆庶のたゝひ耶蘇を見をかもとも我ハ決して耶蘇を離まじいへり然を

火箭ハ佛所六章十六

大辟死蔭谷詩三篇六節

摩西出埃及三十三章十五

ども其後ハ他の人をも過きて敵を負とこゝ〜あり。夫故我々ハ天路を行く道中で個様ある賊にあて我を劫やうきこゝと聞かるで謹で堅き甲〜信仰の盾を用意きるこゝ肝要なり昔〜或る人が彼の賊王を禦ぐふ信仰の盾なかりゝうば終に其戰ハ勝ざり如故に我等若〜右の甲〜盾を持ざりゝかゝで彼の賊を決して我を恐きぞ或識者の言に諸の者ゝるハ第一ふ信仰の盾を用意きぐ〜若〜此盾を用ゆるふおいて惡賊の火箭も其きるしなし。且ゝ主に祈て主常ふ我を守り我〜共に行たまへんを求むべ〜昔〜大辟死蔭谷に居〜〜如此信仰の盾を持〜故に其心安ゝ〜。ゝ〜摩西も神〜共に行ふにゝ〜ざれぞ決〜〜

其任處を去ることを好まず反つ〜其處で死きるを增なりゝせん我兄弟ヨ神若〜我等〜共に行たまハで千萬の敵ありゝも恐るふ足らぞ若〜ゝ〜神〜共に居ざり〜かゝで假令如何なる強勇者来りて我を助くるも皆必ぞ死きべし。我嘗て苦戰をなせ〜〜如主の助ゝりて死せざるをえゝる然〜我が其敵ふ負ざり〜勇ふ誇ることゝ能ハぞ只此後惡賊ふ逢ざり〜かゝば我が喜びい更に大いなるべし。我をいまぐ大いなる危きこゝに出遇ぞ前〜獅子熊ふでゆひ〜きゝあり〜〜が其時之がたゝ呑噬ざゝ〜ハ我が幸なり。此後ハ唯一圖に惡賊に出逢んことを恐るゝ〜ゝれども若〜ゝ之に遇ふこゝの有〜かゝで神

必らず我を助けたまんことを希望の所なり

聖徒信小事難成　與敵相逢必大驚
若頼耶穌專信主　敵雖千萬力能勝

夫より基督徒と羨徒は前に行く無知も亦之に隨ひしが時に或所に至りしに正途に混入たる一つの途あり其途は直く平らにして正途ふまぎらはしくうれば二徒は此所へ佇立て何をか正途とも定めがたく躊躇して居る所へ一の黒漢か皎白の衣を着て二徒の所に來り君等は何故其處に立たまへやと問へば二徒は之に答えて我等は天國に旅する者なるが此両途に遇ふて何をか分ち難けれども此處に立たるなり黒漢の曰はく我も亦其處に往かんとまれば我に從へと來り玉へとて終に二徒は黒漢に從ひ偏たる途より往もとめたが其路次第に向きがかりて間もなく天國は背後となりしに二徒は猶も之に從ふ樣子なりしが是又間もなく網中に引入られ足は之が為に纏絆て身動きもなくなる時に黒漢の皎たる衣は忽ち脱だり二徒は此有樣を見て脱出んとまれども脱るる事あたはずして暫し網の中に在て痛哭なり其時基督徒は美徒に向て曰く謹で諂媚ものと防ぐことは牧者が戒しめたるが今我は誤りしかなと知まり所羅門の言ひしごとく小人其隣に諂媚は猶網を布て人の足を纏ふこの如しとむべなるかな（箴言廿九章五）「美牧者は前に我等に道

哥林多後十一章十三

中記とかくて我等の迷さぬようなせーふ我ハ之をみることを忘れて此亡びの途さ陷りたるを大辟の言る言葉さ凡そ我ゞの行動ハ即ち主の言と以て自ら守れバ諸の亡ぶる途さ入らぎト（詩十七篇四節）然るふ今我等の此ぢ〳〵たるハ誠さ大辟の智さ及ざるなりト語りあひて〳〵網の中ふ〳〵嘆哭ーが後一乃光耀者手ふ鞭と執て二徒ゟ近づきて曰く何まゝ來りまゝ何故此處ふあるや「二徒吾等ハ困苦旅人なるゞ郁山ふ往んゝして一の黑漢さ出遇ーさ其者も亦旅人なるゝーふ〳〵我等を導ぢこれふ随うゝ〳〵終さ路と誤りーなり鞭と執者の曰ゝう此黑漢ハ即ち諂媚者也狼と光明ふ托て假ふ基督の使徒たるのゝト言詐つて其網と裂二徒と

申命廿五章二節

其中ゝを助け出ーしふ向つ〳〵我ふまさゞ〳〵我爾と導きゝ〳〵正路ゟ返さんとて二徒と引て原野ふ入り其時二人さ問ていゝまゝう昨夜ハ何處ふ宿りーや「夜昨夜ハ樂山さおいゝ牧者の幕中ふ宿りと「執鞭牧者ゞ道中記とあゝへざりーや「二徒與へゝう「執鞭左樣ならバ何故ふ早ゝ道中記を見ることを為ず猶豫ゞて居たりしや「二徒我等其事を忘れたるゞ「執牧者ゞ爾を戒ぬゝ〳〵謹んで諂媚そのと防けとハ言ざるーや「二徒其言ハ聞たるとも但此人の言ところゞ甚ざ婉ゝうーー故ふ諂媚とハ思ハざりーー也其時我夢の中さ鞭と執者を見まゝ彼ハ二徒と地さ偃ーー鞭と以て之と鞭ちたり如何とゞれバ彼等とゝ〳〵正路とあゆまぬせんとなりー且鞭ゝつ時之ふ曰ゝう我愛する所乃

默示三章十九節

者ハ之を譴之と鞭う一故に當に志を鋭して悔改べしと命おもうく復往くめ且之に告るうう牧者ゞ示せ一處の諸〳〵の誡一めハ謹一んゞ忘るゝなかれと時に二徒ハ其恵愛と謝一足と進こたり

路上諸徒此可觀　軽聽諂媚遇艱難
雖蒙救主問羅網　且受重鞭身痛酸

基督徒と美徒の二徒ハ夫より前に進こゝゞ程なく向ふの方うゝ徐行して來る者ゆの基督徒ハ義徒ふ向ふて曰ふう向ふ天國を背ふて後戻を為る者ゞ我等の所に來らんとして「義我も已に之を見一ゞ恐らくハ亦諂媚者なんゝ我等ハ能く慎むべきこゝかりと言時彼人ハ漸次に近づきて二徒の前ふ來まり其名を問天に云者也二徒に向ふ何處ふ往んとまるる者なり。問天此言を聞て大に笑ひ一うむゝ邨山に往んとまるる者なり。問天此言を聞て大に笑ひ一うむ基督徒ハまゝ曰ふう爾何を笑ふや「問爾の無智なると笑ふなり遥々此遠路を行くも徒らふ苦労を招くのみ「基此ハまた何る言ぞや我等ハ天國ふ到るゝも納られまゞと思ふ「問爾ゆ幻想ところの場所ハ此世に無といろゝれバ爾を納るべく誰ゆ其處に居ゞ如や「基此世ふなくとも來世ハ必ず有り一問我昔本邑に住りし時其處のことを聞一故之を尋るため往きく二十年乃餘も住りしゞ今ハ至るまで此處のあるふを

問天詩十篇一節又五十三章一節ノ意

傳道十章十五節愚者徒ニ労シテ益ナシ行ベキ道ヲ知ラズ

此世の樂いく、慾のまゝに享ることゝ做し得べ
しとも、神の許さぬ事も自己の智力みて成就するものとおもへるやア、人智我慾を逞しゝ未來を忘して地獄に落るべし

見ぞ「基實ハ是處あり我等ハ聞て此所乃有と信ずるなり
「罔我ゞの本邑ゝ在り時爾のごとく之を信ずるハ非ぞハ此遠
方と遥々来りて尋ねバ志まぐれども我ハ之と慕ひ之
諸ての世ゝ事と棄たるあり然ども今ゝ其所を見當らざ
るゆゑ復び本邑ゝ歸りて此世の樂みと享んゝまるあり倘を
果して其處ゞ行ゝむ我ハ必ぞ之と見るべし如何みてゝあれバ我
行ゝ道程ハ爾ゝも更ゝ遠ゝれバありとひ其時基督徒ハ
美徒ふ向ふゝ此人の言所ハ真實本當のゝゝあんこの「義我
等ハ謹慎むべし世ゝ諂媚者のたぐひあんん我前ゝ此輩に
從ふて諸の難儀と受たるし兄ハるぜゝ此事と思ハざるや如何

で天國を無ゝせん我等樂山ふおいゝ之と望見ふ非ぞや我
ハ信ゝりて行べゝ目ふりて往ゝ直ゝ切ふ直前して執鞭者
の爲ふ逐るゝなれ聖書ふ曰ゝ迷人ハ智道ゝ離る小子聽くなり
もト（箴言十九章廿七節）此言ハ兄おて我ふ教べきふ今我ハ友つゝ
爾とをゝへたり爾切ふ彼の人ゝ聽ゝれ我等ハ信ふゝ救ひ
を得べきなり「基我ゞ君ふ問をかゝしハ我ゞ信ずる所を疑ひし
ゆへふゝず惟爾を試ゝ爾ゝ誠を表ゝさんとせしゆゑあり我ゝ
早くも彼人ゝの惡世ゝ主ふ迷ひしことを知りたり今我ハ我ゞ信
ずる所の真理ふ於て少しも謬りなきこと我ハ之ゝり直ゝ
進むべし「義今我ハ大いなる栄と企望して心喜ふ勝ざるあり

言つて二徒ハ囹圄と舎て行き囹圄もまた突ふて去る。時に我夢ふ二徒の前行を見るに其後一ツの地にひるがへりが其處ハ凡て初めて入る者ハ其氣ふ感じて睡を催ものの所あり二徒此所ふ來りて時羨徒ハ心つよまて睡たくあり基督徒に曰ふ我今甚だ睡くあるに睫が閉けぬ如くなれど暫く此處に睡ることを欲するなり「基決して不可あり誠に恐る一たび睡らバ醒るまじかるまじ」「羨如何で斯の如くなるんや夫旅して倦る者ハ睡を見ることに羨しき食物のおいしく若し暫時睡ることあらバ精神あるべき爽やかあるべし」「基昨日一牧者の言ふ迷氣地あれハ決して其所に睡るべからずと戒免らるを兄ハ之を忘まじ且聖書に曰

ぎや我輩ハ衆と知らずして寢るなれ當に儆醒謹守べしと（帖撒羅尼迦前五章六）「羨我も過ちを知れり我若し獨此ふ居りなば必ず睡て死に至るべし所羅門の言に一人ハ両人に如かずと誠あるかな此言や（傳道四章九節）兄が我の伴ありこれハ實ふ我の大いなる益あり兄力めて我を勸めて後必ず善報を得べし」「基此所ふ睡らぬため善事を舉て互ふ議論べし」「羨我も其事ハ甚ふ願ハしきことなり」「基互に議論するに先づ何事を論ずべきや」「羨真神の始ふ我心を化せしことを述べよ」「基恐睡於斯當互言　歷將恩化復尋原

看官目を割り玉へ

沉淪馬太七章十三節

羅馬六章廿三節 以弗所五章六節

果能相勸常祈禱　迷氣地中乃不惜

是ゝ出ゝ基督徒ハ美徒ゝ向ひ爾の始めて行ひ今の行の様ふかゝりゝハ何故なるや「義我ゝの昔ゝ此靈魂の寶と如何ゝ知ゝや」問たまふ「基然ル「義虚華市中ゝて賣る所見る所の物ハ素ゝる我ゝ好む所ゝ物なりゝゝの後ゝ此物ハ若ゝ之を好んで止まんで終ふハ沉淪ふゝるべき事と知れり「基其物ゝゝは如何なる物ゝや「美即ち世の財富貴放逸酩酒咒詛讒言淫欲あれ等の諸悪を當時我ゝの樂む所なりゝゝ後ゝ真理を聞て思へらゝ此悪ハ我ゝ者ハ皆真神の震怒を被むりて終ゝ必ず沉淪べし此情を知りゝハ昔虚華市中ゝゝ盡忠と爾ハ言と聞し

第一罪ヲ悟ラス

第二慾ヲ舍ガタシ

ふるなり「基爾ハ其事を知つゝ之を悔あゝらめゝゝ「義無我ハ此罪悪乃非き事罪悪の永刑を知るなれども已ふをひて深く省みることを願ふまで心ゝ真理よつひて感動るゝ雖も目を閉ゝて視ず真理の光ゝ我心と洞燭ふゝを欲せざ爾ゝ「基真神の聖靈ゝ始めゝ爾の心を感ぜゝふ爾ハ何故是のごゝゝ之を拒むゝや「義其故數ゝあり蓋ゝ此のゝゝゝ我心と感動せゝハ真神の恩化なると知らざれハ第一ふハ真神ゝ罪人を化して善ゝ歸せゝめんとする時ハ必ず先づ其罪と悟らゝむるふゝを知らざるゝ因ゝ之を拒き第二ふは其頃我ハ諸の私慾と樂ゝ之を嗜む事甘き食物のゝゝゝ心ゝ之と捨ゝゝゝふ

第三日交悪友ヲ絶タス

因りて之を拒き第三ゆて素より交遊と出場の朋友ハ我甚だ其人と交るを樂こまず其行ふ處とも樂むを因て之を棄るふ忍びざるに因り第四ゆて凡そ罪を悟るの時ハ我が心を甚だ憂驚ふゆ復び其様ふ時に出遇と好まず且憂驚の時乃ごとき其之を心ゝだする思ふことを好まざりゆ多り「基兄乃言とろ我聞ふ罪を悟まさ憂驚まるふ」ゆ出ふ時ゝてハ又無理ゝ其憂驚を免るゝこと有べ「義時とてハ其様なこと多り然ゝ間なく復び其罪を悟憂驚ますゝ甚だゝうき「基爾ゝ復び罪を悟らまゝハ何のゆ多ふるや「義その故ハ澤山なるゆ或ハ路上ゆゝ善人ゝ遇ふ事或ハ偶聖書の道と聞事或ハ已の身ふ病ある事或ハ傍人ふ病有り或ハ人の死たるを哭ゝの聲を聞き或ハ我の死まる時と思ひ及び或ハ人れ暴死まるゝを聞事まも皆我ゝ復び罪を悟て憂驚まむる所なり夫のごとく復び未ざ聞もなきふ我を必ず主の前ゝ到らゝ審を受べき事と思ひ一入憂驚をまゝなるなり「基爾て罪を悟るまゝ其だゝなれども時ゝ爾て必ず任せて無理ふ其憂を免るゝこと出来さるゝや「義固り能ハざるなり如何ゝなれバ我が心ゞ罪を悟ることれ為丹拍まれ且罪を悪むの心もつゝを甚だゝ如ゆ多り然ゝてまゝ思の悪中ゝ入るありて益ゝ我心を愴まめたり偖基督徒ハ義徒ふ向ふゝ曰るゆ其時爾の行ハ如何なりゝや

ふるき悪を赤ふき友達を絶ち力をつゝ神に仕へときふ心こゝに祈禱勤めて聖書を読みまゝ罪なければものいふき戒とぐんゝ看官もこの志とつゝめ行ひ玉へ

「義其時我が自らおもふこゝハ力一杯過をあゝむべき事まて若し左もなくハ沉淪と免れかゝ上一基爾ハ力一杯過を改めんと思ふ其ゞゝ行ゝや「義然り夫のこなゝゞ舊き悪こゝ遠離りふゝ朋友と交ることゝ絶ち且まゝ力をつゝて真の神ふ事へ時々祈禱ゝ勤めて聖書を讀こゝ痛ゝ吾が罪を哭き言といふ時誠を存まる等の事と為ゝ其他こまゝこゝ數事あれども今ことゞゝ述ゞゝ「基其時爾ハ其ゞゝ行ひ自ら其等を以て最ふ宜ゝ思ひ「義一時ハ其ゝゝ謂たり但ゞ死ゝて過を改めゝと雖ども前ふ憂驚ゝゞき思ひ復び我が心こゝ觸たり「基爾まゝでふ舊如悪をあゝめゝこゝ何ゞまゝ是のゞゝ憂驚や「義我と此の

此悪己の功を特むの愚かなる

ゞゝゝるものハ赤いろゝの故あを蓋ゝ聖書ふいふ人の善義いこゝゝ破まゝて汚またる衣のごゝゝト(以賽亜六十四章六)又曰ゝ法を特こて行ふ者ハ義と稱せらゝこゝを得ゞ(加拉太二章十六節)又曰ゝ我僕ゝ主乃命ぜる所を行ふゝも亦まふ自無益の僕ゝいゝゝト(路加十七章十節)此のゞゝ死言ハ聖書中ふおほゝ載てあり故に我自ゝ思ふこゝ自己乃善義ハ破まて汚れたる衣のごゝゝ法を特んで行ふハ真神の前こゝあつゝ義ゝせらゝを得ゞ主の命こゝ從ふも亦無益の僕こゝ屬まこゞ。己の功を特ゝて天國こゝ升らん こゝを冀ゞゝゞ死ハ此則ち愚かる事實こゝ甚だゝ其時まこゝ自らもふこゝ或る商人ゞ若ゝも五百金ゞどの品借をなゝて借

こゝを云ひ次ぐ基督に依賴し罪の赦を得るべきことを述るの頃序ありふ商人が一説話を挿む撰者の手段亦妙

財となりたらんか其後弓取品を現金に拂ふとも倘前の物を拂ふあるいはんで債主は必ず之を官に訴へ終に獄に囚はれ釈放ることを能ふまじ「基督」其事を爾ぢに比較なば如何にそゝ「義我自らと揣見るに我は未だ罪を真神に獲深く其債を負たり故に今過ちを改たむるとも前の債は其まゝ残りたれば我毎に過を改むるの後にも猶前悪の為に沉淪して免れざるを思へ」

時に基督徒は美徒に白く其喩は實に倘再び語りたまへ。義徒の曰く過を改るの後も尚他の原因ありて我が心を安んぜざりし如何にとなれば我が行ふ所の慮おのゝ至善とせる者も細

一日の悪地獄に落ち畢生の善も贖に足らず

に之を視ば尚悪きこと其うちに雑れば前に自ら是とせる自ら賢しとせるにも後には一日の悪はこゝは地獄に陷るに足て畢生の善にいへども贖ふこと能はざるを信ぜり「基時に又汝の行は如何かりしや「義始には方角を失ひ程なくして後衷情を以て事を盡忠に告たり盡忠は我が相識なる白名也時に彼の云けるは若し一の罪なき者の義を得るにあらずは己の義また世界中の義ふても皆我を救ふこと能はずと「基盡忠が言こゝを真なりと信ぜしや「義我もし過を改めて自ら満足するの時彼の言を聞かざるべからず之を愚なりと云ふべきれ但其時は未だ己の過を知らずして己が善にして行ひこゝに悪の雑まること

有と知れバ盡忠の言ふ〳〵ぞ信ぜざるふハ居らまぬかり「基識忠ゞ君〻」の罪なき者ゞこを云〻時汝ハ世間〻是の如き人あり〻度ひ〻ゝ「義始めに其言を聞〻時ハ吾固より之を不思議と〻て疑ひ〻ゝ繼ひて之〻談するゝ漸次〻其事を信ずる樣ふなりたる〻「基此罪なき者〻ハ誰のこゝ又彼ゞ如何〻〻爾を義〻稱するを得せ〻むるやのこゝと爾ハ其時彼ふ問ひ〻か「義然り彼の云ふハ此罪なき者ハ即ち吾主耶蘇ふ〻て今〻真神の右ふ坐せり又曰く義〻稱ぜらるゝんゝ〻ハ則ち耶蘇世ふ在り行ふ所の義。木ゝ懸て受る〻ゝ所ろ其苦我當ゝ之に倚べきなりト我ゞ彼〻ゝ曰〻ハ耶蘇の義ゞ我を主の前〻

て義〻稱するを得せ〻むるゝ何を以て此を致すや彼ゞ云ふ耶蘇ハ即ち全能の主宰世ふありて行ふ〻ゝこゝ死を受るふ至り〻事ハ皆己のためふ非ず實ゝ乃ち人の為なり我若〻信ずゝ之に倚む其義其功をなすゝ我ふ帰まべ〻ト「基時ゝ〻〻爾ゞ行ハ如何なり〻「義時ふ其我を救ふゝ〻を肯ふやゝ疑ひ未ゞ敢て信ずゝおれふ倚ざりゝ「基盡忠ハ爾ふ何ゝ云〻ゝ「義彼の謂ふ往て見べ〻ト我ハ此事を無益なるゝ彼ゞ謂ふハ不然主ハ已〻我ゞ往ゝ〻を請り〻て聖書に載るゝゝ以て（馬太十章廿八節）我ふ示ゝ我ゞ疑を釋るゝ又云聖書の一點一畫ハ諸を天地に較ぶるふ更ふ固ふて廃べ〻ト時ふ我彼ふ問ゝハ我主ふ就

馬太傳十九章十七節於神而外無一善者路加傳十八章十八節

凡苦苦仕重者欲就救則賜爾安

一点一畫馬太五章十八節

んしせむ如何にせべきや彼の云ふ當に心を專ふし意を專らふし跪づきて我心と燭し耶蘇を識るべしと天父に懇求せべしと我まづ彼ふ曰しハ天父ふ懇求ハ如何ふ為べきや彼の云ふ天父ハ時々其恩の坐に坐し凡て其坐ふ就ものふ天父ガ大いなる慈悲をもつて赦宥こゝを喜ぶび玉へと爾當ふ之に就て疑ふなかるべしと其時我まづ彼ふ問ひしハ其恩の坐に就ハ何を言べきや彼の云ふ真神ふ懇求して我ガ罪人を憐ませたまへ耶蘇基督我をして識て信ぜしむ我ハ耶蘇の義と其義に倚るにあるのみなれば終ふ必らず沉淪ことを知れり又主ハ乃ち慈悲の主にして爾の子を遣はして世を救ひ爾乃子を以て喜んで罪人ふ賜ひ

たまへり我聞知りぬ我ハ固より罪人なり主我ガ大罪を赦して以て大恩を表わし爾の子ハ義と念ふ我ガ靈魂を救ひ給へと求めよと云り

其時基督徒の曰やう爾ハ盡忠ふ教らましだいしてふ祈りしや「義我を數次其ごとくして祈たり「基時ふ天の父ハ其子を以て汝に示し爾たれと識せしガ「義多次祈禱たれども其昭示を蒙ふざりしかは「基時に汝ハ如何あるやと「義我固より何の故をも知ることなし「基女その如く數次祈禱をなすに尚主ハ昭示を得ざりしかは最早いのりを止やうとハ思ハざりしや「義然り度々思ハざりしかへり「基然らバ何の為まづ已ずに祈禱をなせしやと「義熟て聞し

さゝに若しも耶蘇の義しあらずば世界中にうゝ我を救ふ者なしと我いこの言を信じたるゝ故ふ自ら思ふやう若しもこのまゝ止で祈禱せずんば我ハ必らず死ぬべくれバ窟にて祈禱して止ぬ猶或ひハ生を望まんふ如ドト又もふ聖書に云ふ天示定期あり若しゝ遲けれバ必ず待て其來る必ず遠やのなしト（哈巴谷二章三節）故ふ祈禱して已ざりしかバ後天の父ハ果して子を以て我ふ示しなりき「基子をもつて爾に示せる其情ハ如何なりしや」義子ととつゝ我ふ示せるハ我が目ふ入れを視るふ非ず吾ゝ心ふ入れを視しなり蓋し或る日のまゝに我ハ甚ず憂戚生涯のうちせ不じの事ハなしのらんと思ふ程のものひ初し

約翰傳六章三十六節不識れ渇

が此ハ我罪の大きゝ且あしきを知りて我ハ必らず地獄ふ陷いり靈魂ハ必ず永刑を受べしト思へバなり其時不意に主耶蘇を見るがゝ天より俯視し我を目てのゝまふ思ふれしゝ其言ふ當ゝ主耶蘇基督を信ずべし方能く救を得んト我ハ応て曰くト主ゝ我ハ乃ち莫大の罪人なり主いひたまふハ吾恩ハ爾を救ふふ足るなり我いひしハ主ゝ主を信せず若何ぞや主いひたまふゝ我ゝ就ものハ永く饑えず我を信まる者ハ永く渇かずト此一言ハ實ふ我として主を信まるごとく主ハ就なく我知らしめたり即ち就も信するを大抵同じ意義ふて若しゝ耶蘇ゝ就ゝ事ら耶蘇の義ハ頼りその拯救を望まば亦られ耶蘇を信まるなり

其時我ハ心ヲ感ジ目ニ涙をながせしが復いひしは主よ我ら罪ハ斯く大いなるふ豈で爾ふ納らるを爾の救をかうむるべきや。主よいひ玉ふは凡そ我に就者ハ我ことごとく之を棄じ約翰傳六章三十五三十七我いとしハ我主に就んと欲して如何せで錯るかしあるまじや。主のひ玉ふハ基督耶蘇の此世に臨ことハ罪人を救をんとなり（提摩太前一章十五）凡て信じて之にくる者ハ罪を赦さるゝ義と稱せらるゝを得若し摩西の律法をだのみて此を得て（羅馬十章四五）今耶蘇ハまでに夫れ律法を尽したれど彼を信ずる者をして義と稱まるを得せしむ彼れ我が罪乃ためふ死に付我が義と稱せらるふたゝふ復ことかへりたり且ゝ我

中保希伯来十二章廿四節其他四福音ニアリ

祈禱希伯来七章廿五節ニ出タリ

を愛し血を以て我が罪に潔ぎ真神と我等とを間に中保となりて永く天に生じ我が為ふ祈禱まし我この言を思ひて義と称せられんとなるべき必ず專ら耶蘇を信じ罪をあがふハ汝んとなるべ必ず其血を頼べき事を知れ且彼が天律にたがゝて律法の刑をうけしハ已のたゝふ然ふせしふ非ず乃ち人の為なれハ若し也ふよ其恩ふ感せしかゝバ即ち救をうべし時ふ我ものことを知り悅樂ハ心ゝ満ながゝ涕ハ両眼ゝ流ふを満懷に基督を愛しまゝ其民を愛し其道を愛しなり其時基督徒ハ義徒ふ向ふて曰く其ゞゝ誠ふ基督を以ゝ爾に示され爾までに之を得し後心ゝなふと感ぜしや詳ふ語り

たまへ「義我之を得しふまて普世の人ゞ自ら稱して義人なりと云へども彼等ハ尚罪中ふあることを知て又真神の義ふ至公なり罪人ハ耶蘇を信ずふりて義とせらるゝふ我知りまる我ゞ前の悪ことを悔愧ふかゝ前日の罔昧なりしを訴れて蓋し基督の美處と我ハ素より思ひ及バざりしゞ故ふり又我ハ聖潔の行をたのしこと切ふ人ふ勸めて耶蘇を信じ其名を尊ばんことを望こたり又自ら思ふ吾身ゝ若し千石の血ゝあゝバ耶蘇のゝめふ悉く流さんも亦我ゞ喜び願ふこゝ所なりと。時ゝ我夢ふ義徒を見れバ彼たゝ廻顧て先刻あとに舍おきたる無知の来るを見基督徒ゝせらひて曰く彼

の年少き者を見よ何故延緩して我等ふ遠く離まて来るや基我之を見るふ彼ハ固ゝり我ゝ同行を樂しまぬふふり「義我おそるふ我等我ゞ意ゝさらりて行き彼もゝ我等と同行るべゝ少しも害なるべし「基然りゝ然れども彼ゝ同行せで必らず害ふらん「義我等其此のだゝゝ事を度へども但彼の来る我僕ゝ二徒ハ暫く待ゝれで無知ハ漸く来り近づきたり基督徒之を呼て曰く早く来る何故其様ゝ延緩まるや「無若し我ゞ深く喜ぶ人ゝ行ゝゝゝゝゝゝゝ我ハ獨行こと喜らんで人ゝ同行まるふゝを喜ばず。時ふ基督徒ハ聲を低くして義徒ふ向ふゝ曰く彼乃同行を樂まぬゝハ我已ゝ言しだゝゝなり但

我等彼ゐ近づかく共ふ行べし且此處い寂莫なれば彼と談話して此日を送るふるうるどと乃ち無知ふ向ふて曰く子今安きら今爾い真神につひて其情いふぞや「無余路を行の時満心常ふ善念ふ満てゐ以て自ら慰めらるこを得るあり」基如何なる善念あるや請我ふ告なまへ「無即ち真の神ゐたまふ我念ひ天國のこを念ふらるあり「基悪魔と諸の沉淪者ふも亦この念あるあり「無我ハ但これを念ふのみなるゐ之を得んこを欲せり「基多くの人ゐ之を得んとまれども終ふ得ざる聖書ゐ曰くおそ懶惰者ハ心を得んを欲まれども終ふ得るゐこなし（箴言十三章四）「無但これ此とおもふのみなるゐ之がためふ又所有を棄たり「基恐らくハ未ゐ其支なるまじ蓋し其所有物をこだ棄るハ甚ゐ仕ゐき支ふて人おかく之を易しといへども其實ハかなり然ると爾ハ真神と天國とを爲こ其所有物を悉く棄てりて之ハ何こをもて証據とするや「無我ゐ心を証據とまべし「基所羅門の云こふ自から其心ゐ恃む者ハ愚なり（箴言廿八章廿六節）「無所羅門の斯く言ひ悪心をゐ者なれども我ゐ心ハ則ち善し「基何の証據なるや「無こゐ天國をのぞこて毎ゐ深く慰さゑられるあり「基此はこ爾の心ふ自ら欺くそのなるんの毎も人ありて一物を得んこを望こ其これを得べきの故あるしといへども其心まこ侈然として

空〻く喜ぶものなり」無余いこので徒らふ故ありきものと望まんや
如何ふ〻ふわれた我が行ふふ所ハ心と相符ぐ故あり「基誰か爾乃
心と行と符合こと〻と証據だてしや「無我が心おれを証すべし「基
ア、此ハ丁度賊が自から〻我ハ賊ふ〻らぎと言て証據たるに異
ることなし爾ハ心と如何ぞ是おり〻も真神の道ふ之と証據た
つるにあらぎハ其他悉憑がたし「無毎も心ふ善ハ念を生せば豈
で善心と非らん且人の行ところ若し真神の誠にあ〻ぐで豈で
善行ふ非らん「基心と善念を生ずることハ固より善心てあり
真神の誠と遵ふて行ふことも亦固より善行あり然まども
但自〻度つ〻善心善行あり〻まるとも未ぶ必らぎしも果し

教を請ふこと
と知るハ無智
ふあ〻チ

無義人 朔雨
ヨリ

て其ぶ〻〻なる〻ざるあり「無然らバ爾ハ意ふ〻ば善念ハ如何
ふなる〻ぐ〻又真神の誠ふあ〻ふ〻行ふふ如何ることやや
請我に告べし「基善念ふも數端あり念の己身に及ぶられで
念ハ真神ふおよび亦基督ふおよぶものなり「無念の己身にお
ぶものと何ふ〻て善しいふや「基若し真神の道ふ合バ善と
いふべし「無念の己身におよぶもの何ふ〻て真神の道に合
といふや「基真神が我等ふつひ〻謂ま〻ぶ〻我等も之と意
へで即ち真神の道ふ合しものあり今試ふ詳ら〻ふ之と言で
真神が我が世人と指て云ふ一の義人なし一の善を行なふ者
あしト又曰人心の圖るところ永く悪念と懐くのみ（創世記

又曰人の云々詩篇五十一篇五節

六章五節）又曰く人の心は幼時より即ち悪念を懐く、我意なり其ずゝ〳〵おろかにして且己身のことを念ふも亦かゝの如くなれば此をかいち善念にして真神乃道に合ものなり「無心」是れなれば我の悪ゐんゝは我は信じがゝ「基爾れ意かゝのこゝろなれば故に生涯自ゝおもふ所一ツの善もなきなり我今進んで之を[illegible]へて夫真神が我等をつゝ〳〵我が心は若何我行は若何と云ふ我もし我が心に行ふとおもふゝ悉く真神の言とゝろと合へば即ち是善念なり「無爾が今ゝ所の意を我が先ふ詳ふ之を言へ「基真神の道我が行ふとこゝろを指して云ふ人の行ふところは曲て直かゝらず不善にして僻なり上詩百廿五篇五）又曰く人生は正道を棄て且つ正道を識らずと（箴言二章十五）人若しや自ゝ其此のごとき念を念ずれば自ら悔ひ自ゝ怨む其念をかいち善にして真神の道に合ふのなり「無念の真神にむかふは當ふ若何をべきや「基真神を念及ゝは聖書に言ところに合ふことにして此をかいち善なり聖書に悉く真神の事を載せたり我今こゝ〳〵述ることを能をず若し真神と我等とのこゝを論ずれば我の人となり真神更に之を知れば我にあつて自ゝ知らざる處乃罪をも真神は則ち之を知り我が深衷蘊念一ツとして其前に露はさざるなし〳〵又我が義とするものをも真神之を視ること如悪臭のごゝなれば若しも已の善をたのんで其前に近づかず真神必ず我

原罪現罪二つの物ともに知らざる

と容まで我真神ふつゝ此のゞゝおもまで即ち善なり「無爾なんぞ我と愚もゝゝごゝ視るや我いうで真神の見るゞゝこゝ為ハ我に勝まぎこせん度ふに我いうで已の善を恃んゝ真神に近づくこゝと為まべきや「基爾の意ゝゝゝゝで若何丑「無其大略といまゞ我ごおらそふすは義ゝ稱せらまんこゝゝバ基督と信ぎべき筈なり「基アゝ爾ハまでゝ其罪と知らざるに又ゝんぞ基督と信ぎるゝ言と得んん若何にゝなわも爾ぞ原染の罪と及び行ふところの悪と皆自ゝゝ之と知らざる故なり夫れ人ハ罪ゆるゞ故ゝ基督の義を得るにゆゝまで真神の前よおいゝ誠ゝ義と稱せられぎ然るを爾の言丑れを心も行をこゝゝ善なりゝ明ゝふ

基督の義と自己の義と生客ハ違ひ

いへまで實丑自ゝゝ其罪を知らぎ然るを何ぞ基督を信まるゝゝゝや「無然りと雖ども我ハ信ぎるなり我ハ善なり「基爾ハ信ぎる所を若何ふ「無我ハ基督罪人のためふ死せゝこゝと信ど且真神の前ふ於て我ハ罪を赦され義ゝ稱せらゝまゝと信ぎ拵ハ我律ふ考ゞふゝ行ふゝゝうして真神恩を得ごゝゝ我と納るなり而ゝうして其我ゝ真神ふ事るの行ふゝう天父よいかゝまこ義ゝ稱せらゝハ即ち基督の功よるもてなり「基斯ゝ爾のいふ所を我ハ辯ぎべゝ夫ま爾乃信ぎるこゝろ此のゞゝゝゝれで實ふ聖書のおゝへふ合ざるゝり聖書に載るゝこゝゝふ據バ人の義ゝせらゝハ基督の義。我ふ歸まるふ因て義ゝ稱せらゝものゝゝ

此の處ハ俗こい
ふ自力他力ハ
違ひあり無知
の人所ハ自力
ハ意ゆり基督
徒の人所ハ偽
のこゝろあり

真神我ごの行ふ〳〵ところと納我と稱じて義となすにあらざるな
ほ今爾の人所と按ずるふ基督の義ハ我ゞ行ふところ真神く
納らるゝハ後我を稱じて義となすこゝ此毫釐の差を千里にお
ふぶものみて爾ハ信仰ハ實ふ自ゝ誤るものゆり審判の日に
おゝんで此樣乃信ありとも尚真神の怒りを免るべゝゞ夫主と
信じて義〳〵せゝるものハ律法ふよつて望むべきもの無きと知
る故ふ律法を逃まゝく基督の義ふゝるものゆり此義ハ基督ごの
我をめぐゝ我ごの律法ゆゝゞふこゝふゝて真神ふ納らゝる
こゝを得せゝむるこのふゝゝゞ乃ち基督の行ふとゝ弱ハ我
に代つゝ律法ふゝゝゞひ我に代つゝ刑を受たれバ凡て真ゝ

信ずる者ハ專ら此義にゝるて白紀衣の體を蔽ふごゝゝゝ垢な
くして真神ふ薦められ真神ハ我をいれ始めて我を罪せざるべし
「無ア我等ゞもゝゝ基督の行ふとゝろに倚んとほつゝるゝ此の
如きハ人よゝゝるふ私慾を縱まゝに己の意ふ任て妄に行ハ
むるゆり倘ゝも我一たひ基督を信じて即ち其義我に歸し罪と
免され義とせゝるゝたゝと得バ則ち惡と行ふゝも何の害あんや
「基爾の名ハ無知なるごの其言も亦無知なり夫ゝ人ゞ義ゝせゝ
るゝの義ハ知何なる義やるや爾あれと知らゞ又この義と信ゞで
まゝた主ハ怒を免るゝゝと得るを知らゞ且基督の義を信ゝ
るハ其效ハ若何なるやを知さるなり蓋ゝ其義を信まれバ則ち我

心頑の説又妄想の説せ上せこ多し

い真神を悦服ふ〳〵其名と愛〳〵深く其道と愛〳〵。深く其民と愛〳〵れむ爾無知の想ふおく〳〵豈で欲をかしひまふふ〳〵妄に行ふこ〳〵あんや此時義徒い基督徒ふ向つ〳〵曰く天父ゞ基督と以て彼に示せ〳〵や兄之と問ひたまへ無知の言と聞て即ち曰く〳〵此のおく〳〵知こ〳〵にあんや我おそみく爾輩ゞ其様のを〳〵と言い必らず皆心の癲〳〵り發る所なん」義此ハ何言ぞや夫れ基督ハ藏れて真神の所ふあれど初〳〵り人の視及ところみ非ず若〳〵も天父ゞ之ともつ〳〵人ふ示ま〳〵あらまゞ人も終ふ之と識らざるかり」無爾の信い斯のおく〳〵あれども我ハ然らざるかり爾も多〳〵妄想し〳〵我を之に及ずと〳〵ども但我ら

扶の字着眼

信ずるところ度ふ〳〵爾ちとなるべに宜し〳〵「基我ゞ一言を容ヨ此一事ハ爾かくのおく〳〵輕し〳〵言べ〳〵べ夫れ我が善伴の云〳〵ところ我ゞ証まる所ハ蓋し天父ゞ基督をもつて人ふ示まふあらまゞ人馬んぞ〳〵之を識んや且人信をもひて基督ふ接ま此信ハまるまち真神莫大の力人心ふ生ずるかり此のおく紀の有るとも爾こふ之を知らまゞ故ふ速ふ醒悟ま〳〵己の危を揣り奔て王耶蘇に就べし夫耶蘇ハ即ち真神其義ハ即ち真神の義なれば若し其義ふるものハ方ふ罪ふきを得べし「無爾ハ行おくハ甚ゞ疾し我ハ偕ふ行こ〳〵あるまゞ爾まづ行べし我ハ後まあるを要ま。おく〳〵におい〳〵二徒ハ吟〳〵して曰く

無知何故熱愚情　告以忠言曷不聽　若賴己功功未足
惟憑主義義方稱　素行罪惡應沉沒　今倚耶穌始得生
奉勸無知當悔改　不然末路必遭刑

此時基督徒ハ美徒に謂るやう彼の情まことに此のごとくなれハ我等ハ復獨りゆくべしト是ふおいくに二徒ハ疾まとゝみ無知ハ躅躅と後ゝに來れり時に基督徒曰く惜むべし此人ら末路らかゝず不祥一義哀ひあゝ吾邑の人多くハ彼のごとくなり即ち全家も全里も名ハ聖徒なれども其實ハ惡彼のおのゝし我邑ゝゝ此の如き者ハ多くれど況て無知乃本鄉ゝおいくもや

基聖書ふおいくに因ゝ言るなり曰く真神其目みて見られず其耳ふくに聽まず聽ゝまざるふ任まゝ（約翰傳十二章四十）但今爾ゝ我とのゝ此ふあり爾ハ彼ゞおゝ者ふつひて若何おもふや彼ふおいくに時に偶くに其罪と悟り其危おゝ知ることゝあるまゝ乎や「義兄ハ我ゝり年長なれバ先自かゝ之と言ゞ」「基爾ゝ言まゝ我ハ意ふ依らん我おゝふ此輩も亦時ゝゝゝ罪を悟ることゝなれども但其素本無知なるゆゑ自ら其罪を悟るまゝの實ふ有益なるを知らず自ら其罪を悟るの心と戒滅其私意をおこなひて悃然自ら恃む者なり「義我ゞ意くも兄の云ふ處ふ似ゝり蓋ゝ人ゝ罪と悟りて驚懼するハ誠ふ大益あり之ふり初めて天路を行

くこと得たりき其心正うして偏うらざるを得るこちろあり「基人〻斯く罪に驚懼するは固より大いなる益なり蓋し聖書ふ曰く真神を敬畏するも知恵の始めなりト（詩篇百十一の十）要するに驚懼を宜しきに適ふべきものなり「義適宜の驚懼とは何を以て之を言う「基三ツの事ふ弁ぜべし蓋し其發端ハ罪と悟るゆゑ一旦其驚我ふ迫りて一心基督に就て救を得ることを欲せしむる二なり且此驚ひれば必らず能く深く真神を畏れ謹んで其諭ふ恭ひ心をふ以て誠ふ稍違んこと恐き凡ての行ふ所又真神と玷辱我が心の安と害し憂ひと聖霊ふ貽し不信者をして真道を誹謗しむる等を恐る其三なり「義兄の言ふ所ハ誠ふ是のおし然し迷氣地ハ最早行きぎんとするう「基兄ハ何も之其様ふ問を為や此吏の論談ふ厭しゆや「義非然なり今何處と行くゝ知らんと欲せし故なり「基今ゝ最ふ六七里も行うだ即ち此地を過ぐべし然し我ハ汝ふ前言を論ぜべし夫罪と悟て驚懼するゆゑ無知の輩ハ益あり〻知らずして之と戕滅せんとす「義彼ハ何ゆゑ之を滅さんとするう「基第一ハ罪と悟て驚懼するゆゑ固より真神のさせたまふことなり然るふ彼ハ魔鬼の致す所と意ひ他に害せらるんこと恐れて之と拒ぜむるを為すか第二ハ彼ハ驚懼が能く主と信ずるの心と害するを意ふべ

故ふかとつくしてこれを遏めるり惜こか斯人自ら主と信ぜるひりと謂るも其實ひなきあり第三ふ彼ハ懼るべきとまろかと謂ゆる心の偶〻驚懼まるる知ハ仍つ〻自ら〻を恃んで懼れざるなり第四さ彼も〻罪を悟つ〻驚懼まるる知ハ自〻恃こと自ら賢あること能ざるぐ故ふつ〻めく此驚懼を拒むり時ふ基督徒曰く我等いま無知乃あ〻と舍て別く裨益あることを論べ〻義徒曰く此ハ吾ごの樂む所なり但兄復先ふ言たまへ「基此十年ま〻爾の邑ゆく〻一人真道ふ從ぐひ力行先をあるを〻ひ〻者ゆり其名を暫信〻ひ〻ぐ爾ハこれを識や」義識まり彼を素と信實地と離る〻六七里ある絶恩鄉ふお

里反舊と〻〻人の鄰なり「基然り固より友舊と同居せり此人曾て深く醒悟せ〻ぐ我ぐおを〻ふ彼ハ其時實く自ら其罪と罪の應報と知り〻を「義我も亦其ま〻〻意ふなり蓋〻彼の家を吾家を離る〻こと僅ふ十里なるが毎ふ來り〻我を見心く感ぐ目ふ涙せり時ふ我此人と憐惜彼の善を爲べきこと〻望ミなり〻ぐ但其後の樣を觀まハ徒らに主ヨ主ヨといへ「基彼ハ一次我ふむつく意を決て天路と行ん〻まるとひ〻ぐ後たちまち惜身く〻者と朋友さな〻此よりて遂に我を疎ぐたり「義我等いま此人につひく談とせ〻ぐ當く少く此輩を察まこと〻し何ゆ彼ハ忽ち真道を離まし〻や「基此事につひて論ぐるハ誠く

犬轉食・狀得後二章二十二節

天福二字限無キ味ナリ

益なることなり爾先き言ひたまへ「義我おもふ其故四あり第一ふ此輩の心罪を悟るとも雖ども志尚いまだ改たまらざるゆ故き罪を悟ること漸く亡びて真神ふ事ふるの心も亦漸く亡て遂まる其故迹をこのへるあり恰も我夫の狗を見るふ其脾胃もし安かゝぬ時ハ其食物を吐出すあるとき此ハ食物ゆ腹を紊ふりて心ゆゝぬ此事をなせ〜ゆわゆ其疾愈脾胃やまきゝをを仍其咄さこころを嗜て遂ゆ身と轉て悉く之を舐るゆ如し夫れ彼の輩ハ心天堂ふ熱まるハ惟心ゆ地獄と懼る故なれど地獄の懼を漸く冷なれバ罪を悟り驚懼まるの心まで小亡て天福を求るの心も亦亡び遂ゆ其故迹を行ふもの也第二

不見之情のこと前ハ信と行ハ目ふ遇て後ハ世れの愛と云ふ

此輩人を畏るゝこと太甚ゆ信仰ひゝかゝぬ也聖書ふ人と畏るゝの心中ふ陷阱ありト（箴言廿九の廿五）此輩ふかゝ地獄の畏るべきを覚へて時ふ切り救を求むゝしゆゝ但驚懼の心稍寛まれど遂ゆ他意と懷抱て謂ふやう真道ゆ從ゝハふれど則ち人ゆ事をふゝ大なれど則ち其身ゝ家を危ゝ焉んぞ見ざるの情を圖り甘んぞて此を取むゝと自ら知らざるべけん乎と其思ふゝころ此乃ちゝなる故乃ち復世俗に從ふり第三に真道に從ふの羞恥ゆ彼等乃前路を阻げたり蓋〜其心驕傲なまで世の悪ゝを離ゝ真道に從ハゝと視て鄙むべ〜羞べきのゝなす心あり故ふ地獄の懼心において漸〜亡び遂に又その

故迹を行ふなり第四は彼等罪を悟て驚懼まること甚だ畏れ預じめ其後災を知ることを欲せざるなり倘〳〵能〳〵預じめ之を知りて驚懼をゞ或ひハ能〳〵諸〳〵の義に效ふ者ハ逃まて主の處に任み安を得べきふ但彼等ハ罪を悟つて驚懼まること を拒まんとまる故に漸〳〵真神の怒と忘を遂に正と舍て邪をつきしなり「基兄の言ところ亦是彼の心志を究むるに未ざ更に新なるべざるなり罪人ゞの白洲の前にあるゞ〳〵驚懼戰慄して人前ハ前非と痛悔に似たるも其實を究むれゞ刑を懼るゝのこふ過ぎ初めより實に自ら罪と悔るふ非るなり故に彼を放されなゞ必ず復賊とあるべし然るゞ若まこに其罪を悔なは必ずゞ是のゞ〳〵なるなり一度暫信ゞ真道を棄〳〵あるて我もゞふ其由を言へり其後の有様ハ兄之を言たまへ「基我固より之と言ゞ樂めり夫彼等ゞ真道を棄んとまる時ハ心を尽〳〵力を竭〳〵絶て真神を忘ずゞ死まる時審判の事且聖徒自脩の職事まるハ私のふ自ら祈禱まるこゝ或ひハ欲を遏め儆醒罪を悔る等のまゝを念まゞる樣ふつゝ漸々ふ之を棄て凡て熱信の聖徒とゞ彼ハ疎んじて之を遠ざけ後ふ〳〵會堂に到り道を聽きあるひハ聖書を究め或ハ互に天國のこゝを論まる等みふ漸〳〵之を厭ひ時ふまゝ陰ふ聖徒の类と拾ひふ藉て真道を絶且つ漸〳〵放恣私慾の徒ふ近づき相交りて友とまゝ又暗室ふおい〳〵不正語とい

だ〜或ひハ善徒ふ偶〜此悪た事ありハ彼ハ則ち之と喜び益々放恣を行ふて忌まず且つ顕然ふ小悪を玩ぶ遂に堅く僻ことなり悪情畢く露ま既ふ自か〜陥阱ふ納る若し莫大の恩拯ふ〜之と出まにあ〜まば必らず永く悪中に沒せんのハ我夢ふ基督徒義徒の二徒ご此時迷氣地と行過て適要地ふ入を見たり(以實亞六十二章四五)此地ハ地氣清〜且寧〜して天國ふ往の路これふ由べ〜れむ二徒ハ此ふいたりて一時甚ご樂ミ聞ろ百鳥ハ時ふ〜ぎして呼鳴まると聞き日ふ衆花満地ふ見まま〜雎鳩の聲と聞ろ是所の日ハ晝夜長明なるゆゑ此地ふ至まで死蔭谷と隔ること〜遠く絶望の決して到るあ〜まざる所ふて並び〜

疑寨と見ま且其處へ至れご即ち其將ふ往んとまるの城と見まま〜天民ありてこれと相會せり蓋〜此地ハ天ふ近くして天乃光耀者毎ふ此ふ遊び即ち新郎と新娘と重て約まるの所又新郎が新娘とまるこ歓が如く即ち真神其民と喜ぶるり是所ハ酒も穀も悉く足り且一路得んと欲まる所の物此に至りて之と得る甚おほ〜既ふ此所ふ至まバ又天城ふ聲出て大い〜呼ぶを聞く曰く視よや爾ハ救將ふ至んとまて爾の賞偕に來るるり此地の民又二徒と稱して聖民とな〜壬贖ふまころの人とな す(以賽亞六十二章十一十二)時ふ二徒ハ行て此ふ至り天城ふ近づくと得〜ろご其樂ミ前より甚だ〜時ふ漸く天城ふ近づき之を見るま〜

益々明らかなり城は悉く珍珠寶石の建るごとく為街衢は悉く黄金を鋪り故ふ城極めて燦耀と日に映じて冲輝たり基督徒は思慕て疾と歎く義徒も亦志うり故ふ一時ふ留つて痛く呼んで曰く若し我が燦まる所の者に遇む我が為に之と言者愛の情已ふ多く我として魂と銷せしむ（雅歌五章八節）後二徒も力稍健に行ち復前行で漸く行漸く近づけば是處ふ百菓の園ありて門天路ふ通ると見る二徒此ふ至るに園丁道旁に立あり之ふ問て曰く此義園は誰に属まるや園丁曰く此ふ主宰り属ま即ち主宰の種る所ふして自樂ふ兼て諸天路とめ者と樂まる所也是ふ於て二徒と引く内ふ入ま其菓を食ひ

葡萄酒の切り基督の饗

黙示録一章の十六

力を増んまとを請まく主の樂遊ぶ所ともつく之ふ示して歴觀れで二徒ふ暫く此處に留まりて安睡せり我夢く基督徒と義徒乃二徒と見るふ彼等睡の中ふ多く言こと路を行こまくも多けまとも我その何故ふると詩りくに園丁我ふ向て云やう爾何ぞ此を詩るや夫此園の葡萄ハ食して咽ふ下り易く之と食ふ者とく能く言むるなりト時に二徒を見まで睡りを醒て遂ふ自束身となく天城ふ向て上らんとせり然るに城の燦耀その目ふ爍まて二徒ハ之と注視ごとく能ハざりき。時ふ其衣ハ金の耀のごとく其面光ハ日のごとくなる二人あり二徒と出遇に彼二徒と問ひるハ爾等何よりの來るや。二徒其情と以て告れで彼まと問ひける様路上にて

以諾創世五章廿四

ち何まこの處ふ宿りまゝ如何なる危難にあひ如何ある安樂と享
や二徒まゝ一々其支と告たりき。其時二人の曰けるハ爾等かゝ
ぎ二ツの難ふあゝべー其後まさふ城中ふあることを得んと。依
て二徒ハ彼と同行せんまゝを請ひけるに二人ハ之と許諾し且曰や
う得る處ハ爾の信を以て得る也。是ふおいゝ彼等と共々ふゆ
き已ふ城門の近づくると見たり。時ハ我二徒と城門この間ゝ
即死と名ぢけゝる一ツの河あると見る其上ハ擁かゝ河まゝ
極めゝ深ゝれむ二徒ハ之を見て驚ゝ甚ゝ引ゝへさんと志
ゝれむ彼の二人の曰ゝ若ー此河を過ぎれバ城門ふ及ぶを得ど「後
城門ふ及ぶべき他の徑ハ無や「二人あり然ゝこゝも以諾以利亜の外

以利亜列王下二章十一

深水大浪詩篇四十二の七節上同六十九の二節二章ソ実地詩四十二篇一節乳出埃及記三章八節

開闢より以來尚いまゞ人の此徑ふ由と許さゞ即ち末日「ラッパ」
のなる時ふハ亦人おれゝ由こと成ゝ。時ふ基督徒ハ心ゝ憂鬱を
いだきゝ義徒もまゝ然り左右四顧もゝ別ふ他策の此河を
渡ることゝ免かゝを得ざれむ乃ち二人ふ問て曰ゝ河水ハいづれ
ゝ所も皆深ゝ乎「二人否但此ゝいりてゝ我爾を助ることゝ能
ゝず汝の信仰の大小ゝ依て必ず此河の淺深を知べー。是ゝ
おいゝ二徒ハ河ふ臨んゝ由ゝ基督徒ハ其中ゝ入りゝ漸ゝ
下ゝ沉ゝ大いゝ義徒を呼で曰ゝ我ハおづむ水みふ深ー
大浪我ゝ首と踰ゆ主の波浪おゝゝ我を踰たり「義兄心と
安んぜべー我ハ其底と踐ゝ實地あるを覺えゝり「基死の憂我

「登ること」蓋し或は苦時[illegible]りなるべしや又或は[illegible]トエラの前[illegible]に似たり

危ひ哉基督教の信仰も殆んど絶さんとせしときもちのべし

覺の擾せる下文を知べし下文諸敵どもの照應せり

と続きい流乳流蜜の地我必ず見ると得じ。時小幽暗驚懼そ叢集て基督徒登ること能はず昏昧前を視て見へず幾ど人事と省えず前小得る所の恩恵時と追憶ふこと能はずして循次に之を言あとまず其時いふところハ悉く其憂懼をいふこのみて河小沒むの中天城小入ることを獲ざると恐ると又いまだ聖徒なるべき前聖徒となる以後等よおしく獲ところの罪と此際丑おいて一々追憶憂感まことにおかりき。又其時魔鬼のなんぞ擾されしハ其言ことを為小知らるなり。義徒力と盡しと之と輔んとまれども亦その首乃沉まざるを免まこと難し。蓋し或ひハ沉んで幾んど死ん〻忽まち又翻然として起ばかり時義徒彼を撫て曰く兄よ我その門を見たり上小人ありて立まふ戒等をむかへんとて「基そは爾を迎んとまるものみて我と迎ふる小非るなり蓋爾と我〻ハ互ひ小識〻仲なるが爾の品行と義とをべられもあり「義兄の品行も亦義をべ〻「基兄よ我として果〻て此のごと〻なるハ主今豈我と救ずず我が罪小〻つて我を陷阱の中小引て我と棄るにあ〻まで」「義聖書に曰く彼の死もること亦縛とらくるなり〻其力堅固なり他人の苦と受るがごとき小非ず他人の煩擾さるごとき小非ず」（詩七十三の四五）此固より悪人を指して言なり兄小之と忘まて〻や今兄水中小おい〻此苦辛と憂擾小あ〻て此小ても真神の

陷阱以賽亞書四章十七節

陷阱の詞を聞て讀者悚然たり危〻

石沉淵出埃及十五章一節

石の静尾希米記九章十一節

爾を棄るにいたらざると証まるなり蓋し真神爾を試みて爾ハ前に得るところの恩と今まれを憶ふべるの且苦みの中に於ても主と信じ其生命を保と觀んとなり（我基督徒と見まで此とき）て一時黙想せり「義兄心と安〜すべし」（馬太九章二節）耶蘇基督爾ぢを救へり是まい〜基督徒大ひに呼で曰〜嘻我復之と見る主我ふ向ふて冒〜爾諸水を過るふ我ふ〜ぢ爾〜偕ふ〜ん爾諸河を過るふ決して没ることきふ〜ト（以賽亜四十三章二節）是にまい〜二徒の心懇やもし河を濟り岸ふのぞるふおろんで彼の諸〜の獻ハ石の静まり〜ぶ〜復あい擾ずず時ハ基督徒ハ又實地の踐べきを得後

謹誌夢物語と一例ふ

肉衣まこふ名文驚き汗を背官ふ赤らにおて一時黙想ふ

河ふ〜〜〜淺ちをおぼえたり二徒河を濟る其情かくもむ〜〜時ふ二徒彼の岸ふ登まで前ふ見る二人已ふ是處ふ〜相俟ち二徒ハ河を出るとも之を賀〜て曰〜我ら乃ち役使の靈ふ〜て凡て救ひを得んとまる者ハ事へん爲遣はされたる者なり（希伯來一章十四）是さおい〜共ふ行き漸〜城門ふむふて往ク。今まさに謹〜んで其城を誌もべ〜即ち巍山の上ハなり二徒此ふ登るとも之二人其手ふ〜之を扶け〜にうり之ふのぼること甚まぐ易く且其肉體なる衣ハ已ふ河乃中ハ遺〜たり蓋し河ふ入る時ハ此衣ありて河を出ること則ハ無〜故ふ城の基ハ雲より高〜と雖も二徒の上昇ふ〜飄然と〜て便捷〜時に二人

害なくして河と渡る害あり て川と渡ること疑考べし

と談して甚ぶ樂しなりそは害なくして河を渡りふり又此二の光輝たる者ふ送らるを得ふりて心甚だぶ欣慰つその時談まとまろ皆天國の栄を言りぷ二人曰く天國の義しきこと〳〵天國の栄ハ言ふつ〳〵〳〵又曰く此所ふ郁山天上の耶路撒冷あり(希伯來十二章廿三四)天使千々万々會集し又義人の靈ありて天國の全らた福を得ふり爾も今まさふ真神の樂園ふ往き生命樹を見ると得其水く鮮なる菓と食ふこと〳〵を得んとて爾このところふ到らば必らず白衣をきつ〳〵爾にたまひ日々主と互ひと言ひ共ふあそび世々窮りなろん爾世〳〵處し時ハ憂悶疾病苦辛死亡等諸吏あり〳〵ぶ

是ところ迄ハ終ふ復られを見ぶ蓋し前事ハ已往く(黙示録廿一章四節)爾今まさふ亜伯拉罕・以撒・雅各・および諸〳〵の預言者ふ近づくを得んとて此等の人ハ皆真神の救つる人ぶして生前義と行ひ今ハ安樂を得しものなり二徒彼ふ問ぶるハ我等聖所に到らハ行ふところ當ふ如何ふまべきや二人曰く爾ところふ到らば必らず労を安きふ易へ憂を喜びふ易へ爾ぶ前世にありて播とろの新禱流沸主のたぶふ難とらくる等是ところに到りて必らず其菓を得ん且つ是ところふ在りて必ず金冕を戴きて天の聖主お時々見ることを得其真栄の如何し見ハ見る所必ず二つふ〳〵ぶ(約翰一書三章の二爾

全恢之主歎句
大意帖撒羅尼迦四章十三節至十七節

前世ふあるさた困まる主ゐ事くんと欲せり然もじも肉体軟弱して之ゑ事ふること難ろうゝゞ人ゝ爾この處に到らぢ必ぢ常に主に事へ讃美歡呼稱謝して時々俟ぢ是處全能の主爾の目ゆらも其栄を見ると樂ゝこと耳ろゝゝず其聲を聞をたのゝを友乃先に此處ゑ往ゝ者も爾往うぢ必ぢ重ねゝ會ゝ爾のゆゝこうり來る者ハ爾まさ喜んで之を迎へ且爾この所ゑ居らも必ぢ栄光を得て衣とゝ栄車を乗ものゝちゝ足栄主と同じゝ行き主天の雲に乗て下り「ラッパ」の鳴る時ゑい爾も亦之と同じゝ往くと得主審の坐ゆる時(哥林多前六章二三。但以理七章九ト十)爾まゝ旁坐と得且或ひも悪鬼あるひも悪人の罪を主ろ斷くとき爾も

羔の婚筵黙示十九章九

亦與り斷くゝ得ん蓋ゝ主の敵ハ素より爾の敵ゆれハゆり審おまりて主天國ゆ歸る時ハ爾まゝ之と共じゝ歸りて主と永居まると得んト斯の如ゝ互ゝ談つゝ漸ゝ城門ゆ近つけハ忽ち衆天軍あゝて出むうゝり。二光耀者二徒と指ざゝ天軍ゆ向ふて曰く此ハ即ち世ゆ在て主と愛ゝ主のためゆ所有と舍る者なりゝ主我とつゝハゝて彼と帶まゝり今已ゝ此ゝ至もり彼とゝて城ゝ入り主と見ゝ喜びと得せゝのゝ時ゝ天軍歡んで之と賀ゝて曰く凡そ羔の婚筵ゆ赴むうんと為る者ハ福ゆり時に主の樂工ありて出迎へり衣白くゝて且耀き聲太ひゝゝて和ゝ音響天ゆ震へり、二徒世と離もて此に至るゆ衆の樂工

極めて之を賀し其口ハ歡呼し其樂ハ大ひに作り二徒と周旋して
或ひハ先となり或ハ後となり或ハ右或ハ左となり之を護つて上
昇ぐごとし一路樂作高聲和鳴せり人若し其此の如たと見ば其
意必ず天より降て迎ゆるものとせん衆此の如して前行む樂
工歡然時々音樂を奏し手とあげ足と蹈て其二徒と得て伴と
爲まと樂て喜び來りて相むかふると知らしむ時ハ二徒未だ天
城ハ入らざるに雖も已ハ在天の樂さて如く諸天使と見ると得
更て其樂の雍和まるを聞た自ら樂て勝ず時て行て此に
至まで城すでに全く見たれ恍として一城鼓鐘と聞くハ將ハ之
を迎へて入んとするハ似て二徒又おを入さ必らず此衆と得て

伴とし此ハ居て天と樂み世々遷らざんと心さらんぶし
極めて甚だしく其時の栄樂孰らか口墨を以て之と傳
へんや二徒行て天門ハいたるの情かくのごとし時て其門に
門首を見て金の文字あり凡そ主の誡しめハ遵ふ者ハ
福なり應て生命樹と得べく且門ハ入て城に入るべし一黙示
録廿二章十四と合てなり時て我夢のうちハ見てあれど二
光耀者二徒小門とたくけしく命じ既て其門を扣けバ人ありて
門上より視下たり是ハまもち以諾摩西以利亜等ハ
衆ハれハ告て曰ク汝此二徒ハ主と愛まハ因て將亡城を
離まて來るなりト是時二徒ハ前て得しところの憑巻と取出

て納めたり遂ふ此卷物を以て主ふ呈しくれたる主經閲畢りて乃ち曰く其人ハ安くふ在る曰く茲ふ門外ふ立たり主乃ち命じて門を開き眞道を守るの義民と為く入るふくを得せしむ

（以賽亞廿六章二）我夢ふ二徒の天城ふ入ると見しに適て門ふ入まで貌まるふ忽ち變じ金の如き光ある衣を得又其前ふ琴を冠とを執て之を賜ふ其琴ハ主と讃べく其冠ハ即ち尊貴の冠なり。時に我夢聞ふ聞けば擧城鐘鼓のこゑありて歡然大作つ二徒ふ謂て曰く請爾主の樂こをたのしめ（馬太廿五章廿一節）又聞くふ二徒高聲ふ唱へて曰るハ願くハ福祉と尊榮と權力と天の位ふ坐まる者および羔ふ歸して世々

聖義ニ治資ス六章三節ノ次條ニ出クリ

窮りなけん（默示錄五章十三節）方門適く開けし二徒と放ち入る。我其中と窺ふ城の耀く日の如く街衢ハ悉く黃金を鋪き上に多くの人ありて行く首に金乃冠を戴き手に勝敵の棗枝と主と讃ふるの金琴を執りたり又衆中を見しに身ふ翼ありる者相呼で曰く聖なるかな聖なるかな吾主眞神と（默示錄四章八節）其後門まかり闔るり我斯の情と觀て甚だ我もまく其中ふ在んこをを欲したり此時我正ふ此を顧て偶く頭と廻顧に爰に無知の適く河旁に近くあり彼ハ河と過るまく甚しく速やかふして大いふ二徒の艱難と異なりたり蓋し彼此ふ至る時たまく一の虛望と名づくる渡人に

逢しかば小舟にて濟しけまに彼も亦二徒れ如く天山に上り城門に往けり然きども其往とは獨り叫び行て一人も來り迎へ來り賀する者なし既に天門に到り仰ぎて門首の文字を見るに亦門を扣たり意へらく門必らず立どころに開て之を入るべと得んと時に門上より俯視者問て曰く爾は何ぞ來りしか得んと欲するや無知の曰を我素より主の前に在りて飲食し主我所にありて教誨たり時に門上の人は其憑卷を取て主に呈せんことを要めれ無知は是に於て遍懷を搜索とへども其物の無きことを覺へり門上の人之に問ふて曰く爾は其を有ざるか無知は平に語りて對ふるかけまに門内にあるその吏を以て主に達しかり主初めは之を下視ず乃ち前の二乃光耀者に命じて彼の手足を縛り之を曳き立て去らしむ二光耀者手に無知を提げ空に由て往て前見る所の山門に至るふたりの乃ち彼を此に棄多り時に我天門を亦路ありて地獄に通ずること一に將亡城に由るが如く然るあるを知とり。我夢此に至りて乃ち醒む」

夢者讀者に向て曰く

夢裡諸詞述聖經　爾須着意解分明
句々將斯教弟兄　慎勿專思文外事　惟當深究理中情　章々用此傳鄰友

聽ハ青韻古韻庚青通音ナリ
抛棄句恐ル穏ナラズ原書ニ林檎トセル易セスト アリ
十三十四番書二句原文全ク此ノ意ナシ番字唐宋ニ在ラハ
一本ニ番ヲ我ニ作リ譬ヘ人作ル

喻言入耳毋狂笑　真道繩心謹伏聽　五卷余書雖偶然
歴程天路切宜行　誰抛棄曰藁蔵核　孰棄金云金沫精
「番作茲篇爲世鐸　唐從是經得天栄」　而今所夢如無益
誠恐本人別夢生

天路歴程意譯　大尾

明治十四年八月十九日御届
仝　仝　廿九日出版
定價四十五錢

芝區通新町十三番地
福岡縣士族
繼譯人　佐藤喜峰

京橋區銀坐四丁目十三番地
出版人　中田道之助

7
80

7
80

101237-000-1

7-80

天路歴程（意訳）

村上　俊吉／訳

M14

DBY-0565

7
80